

清末小説から 127

2017.10.1

- 漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序・補遺……樽本照雄 1
漢訳リサール辞世詩2 魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪……荒井由美19
『瑞西独立警史』について3完 漢訳「スイス独立史」……沢本香子28
文明戯「ハムレット」について 「鬼詔」と「竊国賊」……樽本照雄36
清末小説から19、43

漢訳ラムに関連する文章2本が掲載されたのは偶然です。研究者の姿勢が重要であるということ
と「いくたびかの阿英目録」はお休み 次号では「『比律賓志士独立伝』の底本」を掲載す

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜8番4-202 樽本照雄方

漢訳ラム『シェイクスピア物語』 の序・補遺

樽本照雄

ラム『シェイクスピア物語』の初期漢訳2種類に関する問題である。

基本をいえば、研究者の理解力が問われている。また、2種類のうちのひとつは林紓冤罪事件につながる。中国現代文学研究に独特のものであり政治との関連で内情は複雑になる。同題前稿を補充する。重複する箇所があるが、ご了承いただきたい。

中国におけるシェイクスピア受容史は、具体的にはふたつの漢訳からはじまった。すなわち英国索士比亜著、漢訳者名不記『瀕外奇譚』(1903。刊年は未確認)および英国莎士比著、林紓+魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』(1904)だ(書誌の詳細は樽目録を参照のこと)。いずれも英文のラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本とする。

それ以前はシェイクスピアの名前だけが多様な漢字を当てて伝えられていた。シェイクスピア戯曲(莎劇と称する)の漢訳が出現するのは1920年代になってからだ。日本よりも時間的にはずっと遅れる。

一方で英文ラム本は一部の人々に読まれてはいた。それが大きく変わるのは1903年あるいは1904年に漢訳ラム本が出現してからだ。より多くの読書人が知ようになる。当然ながら戯曲(莎劇)そのものではない。だが、莎劇(詩)の概要を知るには有用であり特に林訳『吟辺燕語』は中国で広く読まれた。林訳が多くの読者に歓迎され普及したことは、商務印書館の「説部叢書」「林訳小説叢書」「小本小説」などに

収録されているところからも理解できるだろう。

若い頃に『吟辺燕語』を好み影響を受けたと書く郭沫若の自伝はよく紹介される。後に莎劇そのものを読んだが『吟辺燕語』ほどには身近な物には感じなかったと述べた(『私の幼少年時代』)。

ところが、中国の学界にはその初期漢訳について否定的に評価する傾向が定着している。漢訳ラムは作品として翻訳文学史上に大きな意味があるにもかかわらずだ。否定的に見るのは中国文学研究者だけにある独特の現象ではなからうか。

いままで言われている大筋は、次のとおり。

漢訳者たちはもとの戯曲を小説の形式に書き換えて漢訳した。戯曲と小説を区別することができなかった。

これが「区別がつかない論」だ。世界の研究者たち全員は、陰に陽に主として林紘をそう批判しつつ約1世紀が経過した。

長年にわたり広く流布した言説だから深く考える研究者はいないのだろうか。あまりに奇妙な主張なので本当にそう考えて賛同しているのか、と疑問に思わないでもない。

よく考えてほしい。ラム本は莎劇(詩)をもとにして書き直した小説なのだ。もとの小説を底本にして漢訳すれば小説にしかならない。どこに戯曲を小説に書き換えたとする余地があるというのだろうか。多くの研究者が知らぬ顔をするから不可解という。

林訳の底本がラム本だと把握しながら、宋莉華は次のように書く。林紘は莎劇をまったく理解しておらず、『吟辺燕語』はラム姉弟が書き換えたものだとは知らなかった*1。つまり、ラム本を書いたのはシェイクスピアだと林紘は誤解していた。宋莉華は、阿英の意見を取り入れてくり返している。これでは書きかえが問題ではなく、それ以前にシェイクスピアとラムの「区別がつかない」ということだ。ただ罵るだけ。このように林紘を貶め批判非難罵詈雑言

ることだけが続いている。

先に言っておく。漢訳2種類の序文を読めば、訳者たちが莎劇(詩=シェイクスピア戯曲)とラム散文(小説)をはっきりと区別していることがわかる。研究者はどこを読んでいるのかと私は不思議に思う。

さらにいえば、林訳シェイクスピアの底本はラム姉弟のほかはクイラー=クーチが、林訳イブセンの底本はドレイコット・M・デルが小説化した作品である。小説を漢訳して小説になるのは当たり前だと再びいう。林訳を批判する研究者たちがクイラー=クーチとドレイコット・M・デルがいたことを知らなかっただけ。批判の根拠となる事実ももともと存在しない。林紘はやってもいけないことを理由に批判された。これを冤罪という。

基本的事実として重要だから重ねて指摘する。ふたつの漢訳ラムは、莎劇(莎詩といっても同じ)とラム散文を厳密に区別している。研究者がそれを読みとっていないのだ。ここまでは翻訳文学研究という範囲内の問題であると明記しておく。

林訳批判および林紘批判の本質

林訳『吟辺燕語』を根拠にして林紘批判という政治運動がはじまったのは1918年のことだ。漢訳刊行から14年後という長い時間が経過している。その間、清朝が崩壊し中華民国が誕生した。林紘の翻訳になにか不都合な箇所があれば誰かが指摘し問題を提起する時間的余裕は十分にあった。

たとえば、林訳は底本がラム姉弟本であることを隠しているとか、戯曲を小説に書き換えて読者をペテンにかけているとか。14年間にそういう批判が提出されたであろうか。結論をいえば皆無である。底本を明らかにしないのは当時では珍しいことではない。また、知識人は『吟辺燕語』がラム『シェイクスピア物語』であることを知っている。表立っていわないだけ。

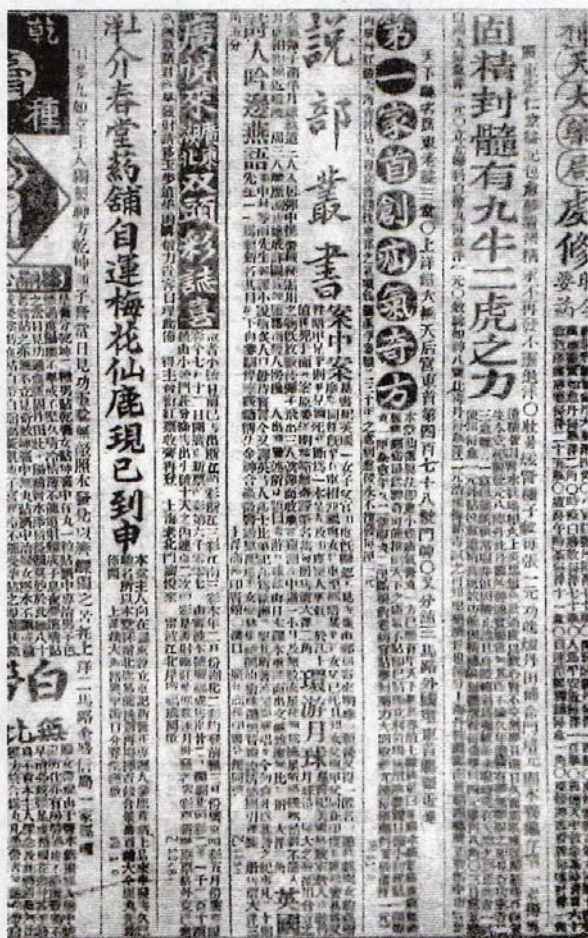
なにしろ漢訳の書名が『英国詩人吟辺燕語』である。「英国詩人」はシェイクスピアを指す。「吟辺燕語」は戯劇物語を意味する。訳書名全体が『シェイクスピア戯曲物語』そのままなのだ。別の表記を示せば『莎氏楽府本事』となる。シェイクスピアが『シェイクスピア物語』を書いたと考えるならば、意図的にねじ曲げて解釈している。宋莉華をあげておいた。曲解にもとづく林紘批判が中国に存在するのは事実だ(後述)。

英国詩人吟辺燕語 / 閩中林琴南先生善訳
小説膾炙人口毋待贅言今又訳英詩人莎士
比筆記莎為歐洲詩聖其所著述梨園演唱至
今勿衰此為其詩之紀事凡二十則……*2

「英詩人莎士比筆記」の「筆記」は「物語」を意味する。すなわち、英国詩人シェイクスピア物語である。「此為其詩之紀事」の「此」は『吟辺燕語』を、「其詩」は莎劇(詩)を、「紀事」とは物語を意味する。『吟辺燕語』とは「莎劇(詩)の物語」だと説明する。『シェイクスピア物語』にほかならない。莎劇そのものとは別だと明記してある。莎劇と区別して間違えようのない説明だ。出版の最初から版元の商務印書館によって明確にされていたことにご注目いただきたい。

商務印書館はこの広告を何度も新聞に掲載している。1904年9月22日付『中外日報』などだ。だから、林紘は莎劇とラム本の区別がつかなかったと主張する知識人はだれもいなかった。仮にいたとすれば、その人は自ら無知であることを認めたことになる。あえて「区別がつかない」と主張したとしたら特別な意図を別に持つ。商務印書館の広告から14年後、実際に「区別がつかない論」を主張して特別な意図をあらわにした青年集団が出現するのだ。

甘永龍注『原文莎氏楽府本事(附漢文釈義英文本)』(上海・商務印書館 庚戌(1910)年五月)という書籍が刊行されている。「TALES FROM SHAKESPEARE / BY CHARLES AND MARY LAMB / WITH CHINESE NOTES / BY KAN TSAO-LING」とある。英文を本体にして漢語の注釈をつけた英語学習書だ。大いに利用されたい。清末に刊行され民初の1912年にはすでに三版を出している。参考までに述べると1915年六版、1919年十六版、1922年十九版、1927年廿四版などがある。中国でも英文ラム本が簡単に入手できた事実を示している。



『新聞報』1904.9.12

版元の商務印書館が1904年9月12日付『新聞報』に「説部叢書」広告を出している。『吟辺燕語』について誤解の生じないように宣伝している。冒頭部分を引用する。説明をする箇所に樽本が下線をほどこした。

林紘『吟辺燕語』を読んだ学生がこの英文本を見れば、『吟辺燕語』の底本であることを理解するかもしれない。

学生の呉宓は1911年の日記に『吟辺燕語』はラム本だろうと記述している*3。呉宓は気がついた。彼は日記にそう書いただけ。それを公表してラム兄弟の名前を出さないのはけしからんと林紘を非難したわけではない。そうする必要もない。

東潤(朱世溱)は「莎氏楽府談」(『太平洋』1917)において、林琴南がラム(林穆)本を翻訳したと明確に指摘する*4。事実だけを述べている。そこに批判する雰囲気は感じられない。いずれも1918年以前の事柄だ。

ラム本を知っている人々は、『吟辺燕語』の底本であることを理解している。漢訳を読んで楽しむ。ただそれのみ。ラム姉弟の名前がないからといって読者を騙しているなどという人はいない。誰も問題にはしなかった。

そうして1918年だ。林紘批判が突然開始された。攻撃の目標は、漢訳者のわからない『解外奇譚』ではなかった。不明者を批判しても意味はない。中国の青年が自分たちの力量を発揮するためには、敵が巨大であればあるほどよい。翻訳でも著名な林紘こそ敵としてふさわしい。批判運動はつぎの人々が主導している。

劉半農と銭玄同(筆名王敬軒)がなれあい芝居(このばあい手紙)を書いて攻撃を開始した。それ以前は林紘の名前など出てきたこともない。なにもないところだから強引という言葉が当てはまる。王敬軒が林紘は「現代の文豪」だと絶賛して『吟辺燕語』をあげる。劉半農がそれに反論して林紘には文学の知識がなく「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麦]」と貶める。そういう筋書きだ。王敬軒は当時の保守派知識人を想定して設定されている。そこから当時の中国では『吟辺燕語』が高く評価されていた実態を逆に知ることができる。

劉半農の反論は『吟辺燕語』にラム姉弟の名

前がないことだけを根拠にする。ただし、彼はラムの名前をわざと出さない。知らないふりをした。あくまでもシェイクスピア作とだけ表記した点をつく。戯曲と小説の区別がつかない、と批判したのだ。林紘は戯曲を小説にかえて翻訳したという意味だ。胡適がそれを追認した。攻撃文章発表の舞台となったのは雑誌『新青年』だ。背後には陳独秀と周氏兄弟がいる。全員が北京大学の関係者だった。当時の校長は蔡元培である。林紘の死後は鄭振鐸が『小説月報』(商務印書館刊行)で別の林紘シェイクスピアを根拠にして林紘批判を決定づけた(後述)。さらに阿英が林紘の「無知」を強調した。現代文学史をいりどる錚々たる人物たちが林紘批判を継続した。戯曲と小説の区別がつかない。そうくり返して主張し続けた。林紘を批判するにあたり、彼が翻訳した作品『吟辺燕語』その他を根拠にしている。

今から思えば奇妙なことはある。まず、林紘たちは反論しなかった。文学革命派を最初から相手にしなかったからだ。もっとも、林紘死去後の批判に対しては反論もできない。

もうひとつは、林紘を支持擁護して文学革命派に反論する知識人も出現しなかった。実際にはいたかもしれないが文学史では無視された。

研究者全員が批判した。そうなる基本構造は、つぎのとおり。負の結論、すなわち漢訳批判が最初から用意されており、それを序文の解説に適用する。結論に合うように序文を読む。研究の順序が逆である。世界の研究者たちが序文を誤読する理由だ。管見によれば驚くべきことに例外がない*5。

中国学界で公認されている林紘批判は、政治運動の結果である。文学革命派の正統性を主張するために、数えて六十七歳という高齢の林紘を引きずり出し有無をいわず反対派の首領に設定した。そういう全体の流れを是認する。その守旧派の代表であり多数の海外小説を翻訳して特別に著名な林紘が、戯曲と小説の区別をつ

けることができなかった。戯曲を小説に書き直して漢訳した。文学について無知である。林紘は外国語ができない翻訳家だ。侮蔑を含ませてそう説明すれば有力な批判材料になると考えたのだろう。虚偽の上に成立している批判と非難だ。それが現在まで続いていることの方が意味で異常だろう。

政治問題だから本来の文学研究とは基本的に関係がない。普通の文学研究であれば、林紘たちが採用した底本を特定することからはじまるはずだからだ。しかし、林訳批判開始の当初から林訳シェイクスピア底本の探索はまったく行なわれなかった。ラム姉弟の名前も出さなければ、クイラー＝クーチ、ドレイコット・M・デルなど探索する気配さえもない。今でもその研究は一部を除いてほとんど存在しない。外国語が関係するから簡単ではないのだろう。

研究者たちが実践しているのは、すでにある林訳批判をくり返すことだけ。新しい発見をせず既存の批判文を複写し再生産するのは、文学研究を装った政治文書でしかない。翻訳研究に見せかけているが、その実態は文学革命派を擁護し支持するための林紘批判という政治運動なのだ。認識しているしていないは別にして基本方針がそうと決まっている。

中国で「文化大革命」が終了したあとの話だ。当時の事情を告白した研究者がいた。ある人物を批判する政治運動があった。その研究者は述べる。批判文を書きたくはなかった。しかし、当時の上級がどうしても書けと命令してくる。それを断われれば自分も反革命と同類だと認定される。それは自らの死を意味する。保身のためにしかたなく文章を公表した。しかし、とその研究者は弁明する。自分は事実だけを書いた。批判はしていない。そういう言い逃れもできるのか。もう40年近く前の文章だ。文章を書くことが自分の生命と直結している。同時代の日本とは根本的に違う世界が中国にはあるとあらためて思ったことだ。何をどのように研究し書い

てもよい自由が日本にはある。研究者生命は別にして自分の肉体的命にかかわることは基本的にはないだろう。

そのことを思い出したのは、現在の中国学界における林紘批判も同じことではないかと考えるからだ。上級の決定が、すべてを支配している。

現代中国における政治と文学研究の優先順位について書いておく。

政治が上位にあり、文学研究はその下位に置かれる。別のいい方をすれば、文学研究は政治に奉仕しなければならない。いうまでもなく毛沢東「文藝講話」の世界だ。政治の基準が変更されるとそれに応じて文学研究も変化する。その逆のばあい、文学研究で新しい事実の発見によって評価が変化する可能性が生じて、政治基準の変更には至らない。あくまでも政治が優先する。いくつか例をあげよう。

評価逆転の実例

1950年代の中国で胡適批判が激しく展開されたことがある。「文化大革命」以後は、その批判運動などまるでなかったかのように胡適を高く評価する論文著作が量産されている。同じ人物について利用される文献、資料も同じでありながら結果としての評価が負から正に逆転するのだ。政治の基準が変更されたことがわかる。

劉鶚（鉄雲）とその作品「老残遊記」も評価が逆転した実例のひとつだ。

劉鉄雲は小説「老残遊記」でも知られている。しかし、彼はたまたま小説を書いただけで職業作家ではない。黄河治水工事に参加し、黄河流域の地図を作製もし治水専門書を書いた。甲骨文字の収集と研究、数学、医学、音楽の分野にも造詣が深かった。1900年の義和団事件に際して北京で難民救済活動を行なった。さらには実業家でもあった。運塩会社を設立し、外国資本の導入による鉱山開発、鉄道敷設を建議したこともある。

中華人民共和国成立後、外国に依存せず自力で発展すること(自力更生)が政治方針であった時代には、外資導入を主張した劉鉄雲は賣国奴(漢奸)だと批判された。賣国奴が書いた「老残遊記」は批判の標的になった。「文化大革命」中は、彼の後裔、親戚縁者、「老残遊記」研究者まで巻き込んで広範な批判運動が実施されたのが事実だ。1970年代末、中国はそれまでの社会主義的計画経済から市場経済へと変換した。経済改革と対外開放(改革開放政策)である。外国資本を積極的に導入する方針が決まると、劉鉄雲のとなえた外資導入は先駆的主張だと称賛されることになった。まさに180度の評価逆転である。

劉鉄雲学会という名目で名誉回復(平反)大会が開催された。私は学術研討会だとばかり考えて足を運ぶと会議への参加を拒否された。説明によると上級が外国人参加の許可をださなかったそうだ。平反大会の様子は外国人には見られなくなかったらしい。それ以後、「老残遊記」評価はそれまでの否定から肯定に変わった。

「老残遊記」批判論文に対して1962年に反論を書き劉鉄雲を擁護した研究者がいた。その人は「文化大革命」中には劉鉄雲を擁護したという理由で肉体を含むひどい批判を受けたという。私はのちにその人について直接質問したことがある。なぜ擁護論文を公表したのか。私の問いに次のように答えられた。「論文を発表したのは純粋な学問研究の問題だと思ったからだ。まさか政治運動だったとは考えもなかった」

中国に住んでいる中国人研究者であってもどこまでが研究でどこからが政治なのか理解しにくいようだ。政治基準がどうなっているのか個人の段階ではわからないようになっているらしい。

商務印書館が一時期日本金港堂と合併会社であったのは歴史的事実だ。だれも否定することはできない。これについての評価がその時々で揺れる。

1903年、商務印書館は日本金港堂と正式に合併会社となった。だが、商務印書館は表向きその事実を隠した。その一方で、新しい国文教科書を編集刊行したことについては、日本人長尾楨太郎(雨山)らの協力があったと大いに宣伝したのだ。隠したいことは自然に漏れる。清末という時代に日本との合併会社であることが商務印書館本来の業務に差し障りをいくつも生じさせた。中華民国が成立すると商務印書館からとび出した陸費逵らが中華書局を設立しこちらも教科書の編集出版を開始する。彼らは商務印書館に勤務していたから日中合併については熟知している。中華書局は、商務印書館にならない自社編集の教科書を新聞広告で宣伝した。その時、商務印書館を攻撃する材料に日本との合併を利用したのだ。新しい中国の子供に異民族と合併している商務印書館が編集刊行した教科書を使用させるのか、と。重なる攻撃にさらされた商務印書館は、1914年に日中合併解消を発表した。実質10年間の合併会社だった。

日本金港堂と合併会社であった事實は、商務印書館(内の上級)にしてみればどうしても隠しておきたい歴史であるようだ。社史でもほとんど触れない。言及したばあいでも、日本資本を吸収してやった、あるいは迫られてしかたなく、と表現が正負の間で揺れた。そういう状況だから合併の事実そのものを知らない研究者も多い。

転換点は1992年あたりだと思う。

商務印書館の指導者のひとりが比較的詳細に合併について証言した内部文書があった。1992年になってそれがようやく公表された。それまでは部外秘だったらしい。また、鄒振環「商務印書館と金港堂 20世紀初中日の一次成功合資」(『出版史料』1992年第4期)がその論文名どおりに日中合併の成功を述べた。時期的に重なる。

私の『初期商務印書館研究』は、2001年に商務印書館汪家燊から翻訳刊行したいと連絡をも

らった。歴史的事実を冷静に見るという流れのなかにあったのかもしれない。

要求されて出版同意書を送ったが、説明もなくそのまま放置された。刊行が実現しなかったのは、拙著に商務印書館が直視したくない歴史的事実が書かれていたからだろうか。あるいはその刊行を望まない政治的情況に変化したのかもしれない。日本と中国をとりまく外交関係によって、両社の合併が取りあげられたり無視されたりを基本的にくり返すという理由だ。

そういう政治優位の状況下において中国の一般研究者がとることのできる対処法は、ひとつだけある。公表される論文の内容を注意深く吟味する。それを頼りにどこまで書くことが許容されるのかを推測する。上位にある政治は、自分で定めた基準を隠蔽することによって下位の文学研究を自在に操作する。それが中国の政治であるとわかる。学術研究だから普遍的に公正な評価が下されるとするのは幻想にすぎない。

林紓批判の現在

私の見るところ、林紓を批判するという政治的基本方針が決まっており現在も継続されている。それ以外の見解は容認されない。つまり、林紓については、ほかと違う見解を公表することは憚られるらしい。憚るものにも、異論があるということを知らない。知っていたとしても表明することができない。林訳を含んだ林紓批判は、中国学界において公認されている。わずかに底本の探索は許容の範囲内らしいとはわかる。だが、私が読んだ限り、林紓批判を否定する論文はほとんど存在しない。例外といえるのは欧陽健「福州近代文化巨人林紓在民国」(2007)*⁶あるいは張俊才 + 王勇著『頑固非尽守旧也』(2012)*⁷くらいだ。後者では出版許可がおりたことを張俊才自身が驚いていた。

林紓批判が先に結論として存在している。研究者は、それにあわせて資料を取捨選択し、批判に役立ちそうな箇所を抜き出し、結論に沿う

ように解釈をする。漢訳ラムの序文を読んだとしても、結局は林紓批判になるように読解する。研究者は、それが不自然だとは感じない。そういう前例しか見ていないからだ。これが政治を文学研究に優先させる構造である。

公認された林紓批判を疑ってみるという健全な研究姿勢がない。ましてや定説を否定する材料、証拠を探し出すという努力は最初から放棄している。というよりも、その視点がもともと存在しない。だからこそ政治問題であって学術研究ではない、という。

現在の中国では林紓批判を否定する文章を書いたとしても、学生ならばまず指導教授が受け取らないだろう。研究者であれば、刊行物の編集者が掲載を拒否するはず。今まで公表された論文を読んだ推測だ。

中国学界では林紓評価については厳しく統制していると考える。私が体験したことからもそう感じる。

それでは、自由であるはずの香港、台湾、日本、欧米の研究者はどうか。私の知る限りこれも例外なく林紓批判を継続している。日本でもある人(瀬戸博士)は自らすすんで林紓批判の文章をいまだに発表している。世界中の大多数の研究者が事大主義的研究姿勢を堅持しているといえる。本人たちは文学研究をしているつもりかもしれない。政治問題だという自覚がないのだろう。

2007年、私は林訳の底本がクイラー=クーチ、ドレイコット・M・デルの小説化本であることを明らかにした。クイラー=クーチによる林訳シェイクスピアは、1916年と林紓死去後の1925年に公表された。デルにもとづく林訳イプセンは1921年の刊行だ。1916年から数えれば約90年間も底本が不明のままだった。結果として林紓は無実の罪を着せられた冤罪であることが証明された。

戯曲を小説化した本が存在していることに研究者の誰ひとりとしてなぜ気づかなかったのか。

その理由は簡単だ。林紘は戯曲を小説の形式に書き換えて漢訳した、戯曲と小説の区別がつかなかった。この結論がはるか昔1924年の鄭振鐸論文によって下されていたからである。誰も異論を唱えたことのなかったその説明は、政治的な結論であるために再検討する人はいない。政治が優先するのだ。文学研究を積み重ねて事実を追究する姿勢は、中国学界の政治基準からすれば叛逆行為に見えるだろう。誰が手を出すだろうか。政治的結論であることを知らない人は、確定された研究成果だと誤解をしたままだ。

文学研究であれば新しい発見はそれまでの評価を一変させる可能性を普通は生む。文学史を書きかえるところまで発展するだろう。

しかし、現在にいたるまで中国学界はそれが林訳批判を否定する証拠になることを認めようとはしない。張俊才さえもクイラー=クーチ、ドレイコット・M・デルには触れない。政治が文学研究に優先しているからだと再びいう。ネット上で事実への言及は見られる。ただし小説化した底本が発見されたという指摘にとどまる。林紘の冤罪認定にはつながらない。新しい事実の発見は、既定の政治基準には少しの影響も及ぼさない。そうならないように操作しているとしか見えない。相変わらず林訳批判、林紘批判がある。林紘に関しては、文学研究ではなく統制された政治運動である。

新しい文献2点

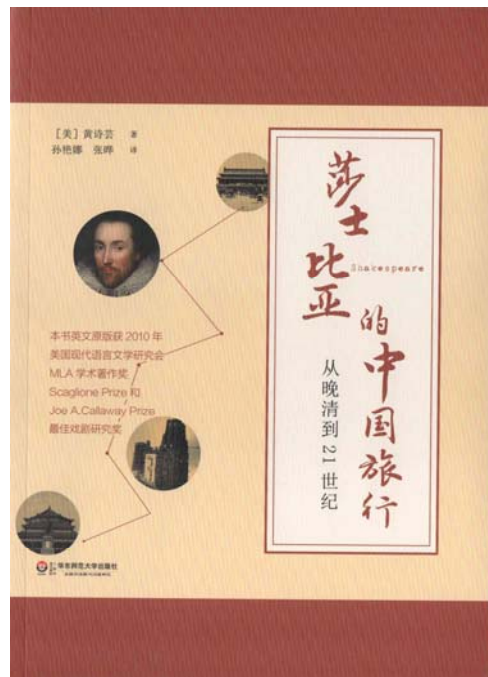
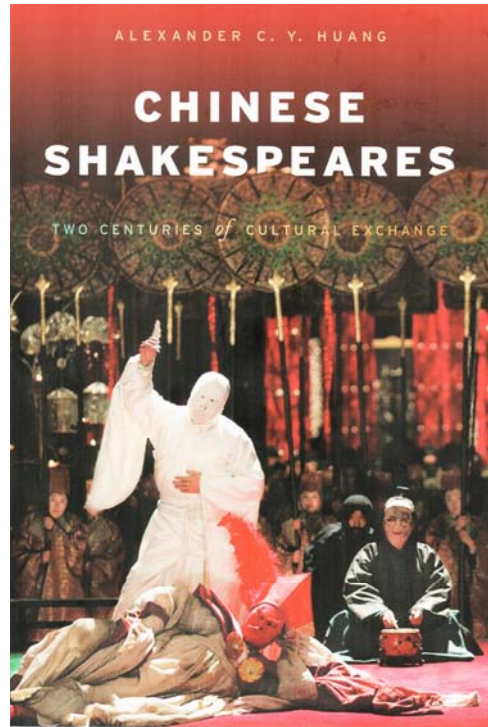
前稿を書いたあとで入手した文献について2本を追加する。以下の2点について検討したい。

論文の執筆者は、初期の漢訳者たちが小説と戯曲を区別していた事実を把握しているだろうか。

もうひとつ、クイラー=クーチが莎劇(詩)を小説化した事実を知っているか。

以上のふたつが評価の基準である。本稿の目的はそれを確認することだ。

本稿で取りあげるのは、以下の2種類。



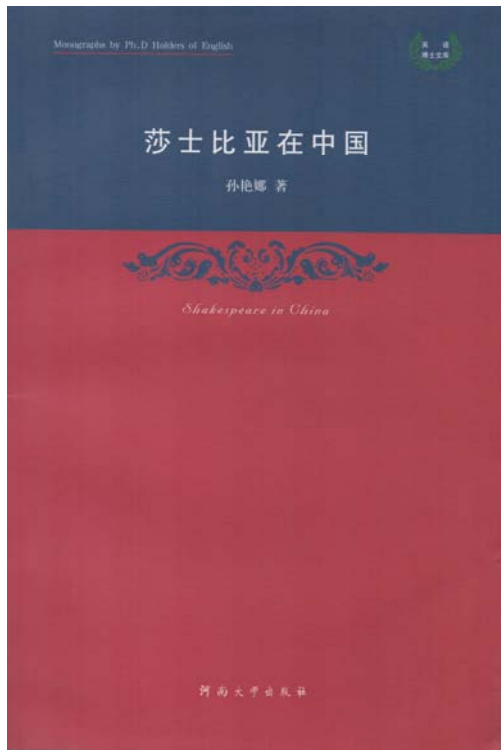
1 (美)黄诗芸著、孙艳娜、张晔译『莎士比亚的中国旅行：從晚清到21世紀』上海・華東師範大学出版社2017.4

原書は、C. Y. HUANG, *CHINESE SHAKESPEARES*;

TWO CENTURIES OF CULTURAL EXCHANGE. COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, 2009 である。この原書は前稿において言及した。説明に重複する箇所があると思う。原書には漢字表記がなかったので HUANG を「フアング」と読んでおいた。原書の表記は ALEXANDER C. Y. HUANG だ。漢訳の著者紹介は英文表記で ALEXA HUANG となっている。漢字表記が黄詩芸だとはじめて知った。C. Y. が詩芸になるのかどうかはわからない。

孫艶娜「訳者後記」によると原書は高い評価を得た。米国現代語学文学協会 (Modern Language Association of America. Aldo and Jeanne Scaglione Prize for Comparative Literary Studies) とニューヨーク大学 (Joe A. Callaway Prize for the Best Book on Drama or Theatre) から表彰されているという。アメリカの学術水準を示していると考えられる。

ふたりが分担して漢訳した。それにもとづき本稿において漢訳部分には【張擘】を使用する。【フアング】原書も参照するのは当然だ。



2 孫艶娜『莎士比亚在中国 SHAKESPEARE IN CHINA』英文 開封・河南大学出版社 2010.9 英語博士文庫

孫艶娜はフアング原書を漢訳したひとりだ。上記の著作は英語で書かれている。叢書名からわかるように英語博士論文をそのまま単行本にしたらしい。引用文には【孫艶娜】を使用する。理解の分岐点ふたつについて、それぞれの説明を見ていく。

初期の漢訳者たちが小説と戯曲を区別していた事実を把握しているか

『瀛外奇譚』と『吟辺燕語』に分ける。

『瀛外奇譚』のはあい

理解するための要点は「海外奇譚叙例」(表紙のみが瀛外。それ以外は海外)に書かれている。研究者が引用しない箇所が実在しているのだ。重要であるにもかかわらず、過去においてそれに言及する人はほとんど見ない。それを「叙例」から引用する(傍線は原文のまま)。

一是書原係詩體。經英儒蘭上行以散文。定名曰 Tales From Shakspere (後略)

本書はもともと詩の形式である。英国の学者ラムによって散文にされ、題名をつけて『シェイクスピア物語 Tales From Shakspere』という。

Shakspere は誤植ではない。シェイクスピアにはいくつかの綴りがある。その中のひとつだ。ところがここを見た前出宋莉華は、誤記しているという。無記名漢訳者について、英語をいくらか知っているだけの新型知識人であると罵る(284頁)。

最初から否定的な結論を下して読むからそういう誤った評価になる。無記名漢訳者を批判しながら、宋莉華自身は訳書名を『瀛外奇談^{ママ}[譚]』

(283-287頁)とすべて間違えて気にしない。

よく見かけるのは、根拠もなく誤植だと判断しShakespeareと勝手に書き直す例だ。研究者としてはやってはならない行為だという認識がない。あるべき引用のしかたはそのままに綴り、注釈をつける。今まで見てきた論文はほとんどが間違っている。たぶん書き直した引用文をくり返して再引用するからだと推測する。「叙例」から直接引用する陳歷明も書き改めている*8。

ラムが莎劇(詩)を書き直して小説にした。無記名漢訳者はそう明確に説明している。ここを知らないと誰もが引用する「叙例」に見える「戯本小説」と「詩詞小説」がわからなくなる。漢訳者は小説と戯曲の区別がつかないという先入観をもって見るからこのふたつの語句を誤読するのは当然だ。張曄の漢訳を示すが、その前にフアングの英語原文を見ておこう(下線は樽本。以下同じ)。

【フアング】Shakespeare is the finest poet in the world. His plays and fiction sweep the world like wind and are immensely popular. p.51

シェイクスピアは世界で最高の詩人だ。彼の芝居と小説は風のように世界に吹き渡り、非常に人気がある。

【張曄】氏乃絶世名優，長於詩詞。其所編戯本小説，風靡一世，推為英国空前大家。31頁

【フアング】Shakespeare's works have been available in French, German, Russian, and Italian. Without even having read his works, Chinese intellectuals have praised him. It is my hope that may translation will remedy the unfortunate situation and enrich the world of fiction. p.71

シェイクスピアの作品は、フランス語、

ドイツ語、ロシア語、イタリア語で入手が可能だ。彼(シェイクスピア)の作品を読むことなく、中国の知識人は彼を称賛した。私の翻訳が不幸な状況を改善し、小説の世界を豊かにするのが私の希望である。

【張曄】訳者遍法[、]徳[、]俄[、]意，幾乎[於]無人不讀，而吾国今学界，言詩詞小説者，又輒嘖嘖称索氏。然其書向未得讀，僕竊恨之，因亟訳述是編，冀為小説界上増一異彩。51頁

フアングは、「叙例」を2カ所に分けて紹介した。原文と異なっている部分がある。前者は周兆祥からの孫引き。後者は孟憲強からの孫引き。張曄は、英語をそのまま漢訳していない。「叙例」原文の方を参照して引用した。そのため英文とは一部が異なってしまった。

フアングは、「絶世名優」、「推為英国空前大家」を省略した。そうして原文で重要な意味をもつ「戯本小説」を「plays and fiction 芝居と小説」に分解して把握している。シェイクスピアが小説を書いたことになる。そこで自分の解釈が奇妙だと気づかなくてはならなかった。しかし、「区別がつかない論」を信じて疑わないから、自分が悪いのではなく無記名漢訳者が間違っていると逆の判断を示した。ここは『シェイクスピア物語』を意味していると理解すべき箇所だ。

フアングは後者の「詩詞小説」は無視した。ただし、訳者の張曄がそれを補った。「言詩詞小説者，又輒嘖嘖称索氏。然其書向未得讀」だ。私が訳す。「『シェイクスピア物語』についていう人はいつもシェイクスピア氏を称賛するのだが、その書はこれまで読むことができなかった」これが原文の意味である。

ここに出てくるラム『シェイクスピア物語』は英語本だ。ラム本を英語で読んだ中国の知識人は、それをもとにしてシェイクスピアを賞賛

した。「これまで読むことができなかった」というのは今まで漢訳されていないという意味だ。だからこそ『シェイクスピア物語』を漢訳して『滌外奇譚』を刊行したとなる。筋の通った説明である。

ところがフアングも張曄も、この「叙例」で出てくるのは「Shakespeare's works シェイクスピアの作品」すなわち莎劇だと思いついでいる。そこから「his works 彼(シェイクスピア)の作品」と書くところがまず誤り。『滌外奇譚』が漢訳ラムであることをすっかり忘れている。つまり、ラム『シェイクスピア物語』の説明をしているにもかかわらず、それを莎劇だと勘違いするのだ。

その基本が理解できないから後半部分の解釈が奇妙なことになる。原文から離れてしまう。「彼(シェイクスピア)の作品を読むことなく、中国の知識人は彼を称賛した」とはなんだろうか。作品を読まずにシェイクスピアを賞賛することがありうるだろうか。当時の知識人は、少なくともラム本を読んで沙翁を称賛した。ラム本は莎劇(詩)にもとづいているのだから無関係というわけではない。フアングの説明は、きわめて不合理で不思議である。不思議というよりも中国の知識人をこれほどばかにした説明もない。シェイクスピアの名前だけを見て彼を称賛することになるからだ。

孟憲強『中国莎学簡史』(1994)*⁹の4[8]頁(フアング、張曄のふたりともなぜか頁数を間違う)から引用した部分は、孫引きに基づいた英訳である。張曄が漢訳しての引用文[]内の読点は原文にはない。また、1部の漢字が異なる。孟憲強が加えて書き換えたものを張曄がそのまま写したとわかる。初出を見たわけではなさそうだ。

誤解の原点は戈宝権の引用ではないかと私は思っている。孟憲強を含めて研究者たちの多くは、『滌外奇譚』そのものではなく戈宝権が示した引用文のみにもとづいてそこだけの引用を

くり返していたという意味だ。

戈宝権は、原本にあるシェイクスピアの綴り Shakspere を書き改め普通に見る Shakespeare にした。原文にはない記号「、」を使用し「於」を「乎」に書き換えた。また、具合が悪いことに「叙例」の冒頭部分しか引用しなかった。本稿で最初に示した蘭ト(ラム)が出てくる箇所があることを示さなかったのだ。

李偉民『中国莎士比亞批評史』(2006. 308-309頁)*¹⁰に引用する「叙例」は、戈宝権「莎士比亞作品在中国」(『莎士比亞研究』創刊号 1983)からの孫引きだと書いている。もう一度いう。戈宝権は、冒頭の1条だけを引用したにすぎない。全文は示していない。これが後の誤解を生む原因になったと考える。「叙例」に見られる前述の重要な部分を引用した研究論文を以前はほとんど見ない*¹¹。

中国の多くの研究者は孟憲強も含めて『滌外奇譚』そのものを見ずに戈宝権が引用した不完全な「叙例」だけを引用してすませた。正しい把握ができないはずだ。

張曄がフアングの英語論文を漢訳する際に「叙例」の原文らしきものを引くことで漢訳にかえた。中国人研究者は、漢語原文をそのまま示すことが多い。その内容を改めて説明しない。だから「戯本小説」「詩詞小説」を正しく理解しているかどうかは不明なのだ。その中身が何か把握しないまま引用しているのだと思う。まさにそこに弊害が出現する。張曄はフアング英語原文を直接漢訳しなかった。孟憲強が引用した「海外奇譚叙例」から漢語原文を孫引いて漢訳にかえた。そのことによりフアングが「叙例」の漢語原文をどのように理解したのかわからなくなった。

鍵語は、「戯本小説」と「詩詞小説」だ。

『滌外奇譚』はラム『シェイクスピア物語』の漢訳であることが基本である。この無記名漢訳者は、莎劇(詩)とラム散文を厳密に区別している。「叙例」においてシェイクスピアを紹

介する部分に「戯本小説」「詩詞小説」とわざわざ表記した。ここは後ろの「小説」に注目しなければならない。シェイクスピアが小説を書いたと解釈すれば、それがまったくの誤りであることは誰にもわかるだろう。自分は理解しているが『瀕外奇譚』に漢訳した中国人は理解していない、と断定するのは傲慢である。

戯本すなわち莎劇にもとづく小説だ。詩詞すなわち莎詩にもとづく小説である。『シェイクスピア物語』を指している。上の「叙例」にでてくる「戯本小説」と「詩詞小説」はふたつとも『シェイクスピア物語』を示していると考えるのが正解だ。『瀕外奇譚』の無記名漢訳者は、正しく理解している。にもかかわらず、研究者の方が誤読する。当時の漢訳者は「区別がつかない」はず、という先入観があるからだ。ゆえに、「戯本小説」「詩詞小説」の小説部分だけを取りあげて、無記名漢訳者はシェイクスピアが小説を書いたと誤解している、と評者自身の無知を晒して平気だ。

もうひとつの原因は前述のように、ほとんどの研究者は「叙例」の全文を読んでいない。戈宝権からはじまり、孟憲強あるいは李偉民が引用した一部分のみを手がかりにして解釈しようと試みる。

ただし、全文を読んだはずの瀬戸博士は、「其所編戯本小説，風靡一世，推為英国空前大家」を次のように翻訳する。「その編んだ戯曲小説は一世を風靡し、英国空前の大家とされた」（瀬戸宏『中国のシェイクスピア』2016*12。96頁）そこを解説して「シェイクスピアが小説を書いたというのも誤解である」（同前）という。これが、前出「評者自身の無知を晒して平気だ」の実例である。瀬戸博士は自らの無知を「叙例」の執筆者に押しつけて間違っている（ここは私の前稿をくり返した）。無記名漢訳者は理解していないという先入観をもって「叙例」を読むから正しく理解できないのである。（日）瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中國』

(2017*13。87頁)においてもそのままに漢訳している。漢訳した陳凌虹も瀬戸博士と同じく正しく把握することができなかった。

フアングの英訳を見れば誤読がわかる。もういちど説明する。「戯本小説」を「彼の芝居と小説 His plays and fiction」に分離した。分離させてはならない語句なのだ。なんどもいうが『シェイクスピア物語』を指している。

「詩詞小説」は無視したが、フアングの記述をたどっていけば「シェイクスピアの作品 Shakespeare's works」に結びつく。原文の「小説」をなかったことにしたとわかる。シェイクスピア作品であれば、戯曲になってしまう。原文では、ラム『シェイクスピア物語』が全世界で読まれていると説明しているのだ。それが、莎劇（詩）そのものになるから事実とは異なる。

フアングは英訳で自分の無理解を示した。張擘がそれを漢語原文の孫引きで隠蔽してしまったことになる。あるいは張擘もフアングと同見解だから不審には思わなかったか。

孫艶娜も「叙例」の冒頭を引用し英訳する。彼女が「叙例」には別の部分があることを知っているかどうかは不明。言及がないから知らないのだろう。注では原文を示しているが、これも李偉民のものに依っている。曾孫引きになる。「戯本小説」と「詩詞小説」はどう理解しているだろうか。

【孫艶娜】The book was written by the Englishman Shakespeare (1656-1616). He was extraordinarily good at poetry. His dramas became terribly fashionable and he was regarded as the greatest writer in England. p.98

本書は英国人シェイクスピア（1656-1616）によって書かれた。彼は詩において特別にすばらしかった。彼の戯曲はとも流行し彼は英国最大の作家だと見なされた。

シェイクスピアの生年が間違っている。その原因は依った李偉民の孫引きが「千五百六年生」と誤記をしているからだ。孫艶娜はシェイクスピア研究の専門家だから、誤りは注釈をつけて訂正すべきだった。

この間違いはどこかで見たことがある。思い出した。前稿ですでに検討していた。YANNA SUN, *SHAKESPEARE IN CHINA*. (DRESDEN: 2008.4 電字版)だ。YANNA SUNという署名(漢字表記はない)、英語論文でありドレスデンで公表された博士論文だからドイツ人研究者だとばかり思った。だから、姓をとりあえずサンと読んでおいた。なんのことはない、このYANNA SUNは、孫艶娜を現代漢語のピンインで表記したものにほかならない。

それにしても没年をこえた生年があるはずがない。博士論文で誤記し、それを審査したドレスデンの教授たちも見逃した。中国で単行本を出すにあたり担当編集者も気づかなかったということらしい。不思議(杜撰)なことがあるものだ。

ここでもあらためて指摘しておこう。「叙例」に出てくる「戯本小説」を「His dramas」と考え莎劇(詩)だと断定した。間違い。『シェイクスピア物語』である。

【孫艶娜】Shakespeare's works were welcomed by the reader in France, Germany, Russia and Italy. p.98

シェイクスピアの作品は、フランス、ドイツ、ロシア、イタリアの読者によって歓迎された。

この「Shakespeare's works」は「叙例」にはない。孫艶娜が補足した。前の部分で「戯本小説」を莎劇だと誤解したからここもそれを引きずっている。補足するならば『シェイクスピア物語』にしなければならない。

【孫艶娜】In contrast to the situation in European countries, none of the Chinese people has ever really read his works, although later on, in particular the intellectual classes sang high praise of Shakespeare when talking about poetry and novels. pp.98-99

ヨーロッパ各国の状況とは対照的に中国人はだれも彼の作品を本当に読んだことがなかった。しかし、のちに特別な知識階層において詩と小説について話するときシェイクスピアを絶賛した。

この部分はフアングの解釈と同じだ。孫艶娜がドイツで博士課程にいたとき、フアングは「学外の指導教授[校外導師]」だったという。偶然の一致かもしれないが、解釈が同じなもの不思議ではない気がする。

「中国人はだれも彼の作品を本当に読んだことがなかった」の「彼の作品」とは、孫艶娜の解釈によれば莎劇になる。誰も読んだことがないのに絶賛するという矛盾に気づいていない。

孫艶娜も原文の「詩詞小説」を「詩詞 poetry」と「小説 novels」に分離した。詩と小説に一般化したうえで突然のシェイクスピア称賛というつながりになる。文章の前後で話のつじつまが合わない。彼女も「詩詞小説」を二分させて支離滅裂状態に導いた。

孫艶娜は、「叙例」を誤読して無記名漢訳者の理解度を不当に低く評価する。そればかりか中国の知識人をひどく貶めている。

『吟辺燕語』のばあい

結論からいう。林紘は、『吟辺燕語』の序において莎劇(詩)とラム『シェイクスピア物語』を厳密に区別している。次の用語を使い分けていることを見ればわかる。

「詩家之莎士比」とある。莎劇は詩だ。ゆえ

に、詩人のシェイクスピアを指す。戯曲家のシェイクスピアとしても同じ。「莎氏之詩」は莎劇(詩)を意味する。

それに対して「莎士比筆記」「莎詩之記事」「莎氏紀事」などは、小説の『シェイクスピア物語』を示して使用している。表現に変化をもたせたが内容はひとつだ。

林紓がこれらの語句を区別していることを研究者は理解しているか。これがもうひとつの要点である。すなわち林紓が戯曲と小説を区別していることは、この用語を使い分けているのを見ればわかるはずだ。

【フアング】Lin had no knowledge of any foreign language or culture, not did he feel the need for such knowledge. In Lin and Wei's collaboration, Wei would therefore orally render the stories and the main plot into Chinese, which Lin would then adapt to the style of classical Chinese and, in the case of dramas, to the conventions of *chuanqi*. p.78

林は外国語、あるいは外国文化を理解しなかったし、理解しなければならぬとも考えなかった。彼らの共同作業では、魏易が物語と主となる筋を口頭で中国語に翻訳するとそれを林が古典中国語の形に書き換え、戯曲であれば伝奇の形に書き換える。(注:英文のイタリック体は日訳ではゴチック体にした)

【張擘】林紓不懂外語或外国文化，也不認為非懂不可。在他們的合作中，魏易用中文為他講述故事的主要情節，林紓邊聽邊將它改写成文言文，戲劇類的作品一般都改為伝奇。55頁

林紓たちの翻訳方法を説明している。魏易が口述し林紓が文言文で記述する。そこまではいい。問題は「伝奇」である。

林紓が「in the case of dramas, to the conventions of *chuanqi*. 戯曲であれば伝奇の形に書き換える」とフアングは書いている。

フアングの説明によると「伝奇」とは、唐代におこった短篇小説、また元朝末期に流行した戯曲だという(272頁注53。【張擘】249-250頁注182)。どちらの意味で使っているのか。伝奇は短篇小説なのか戯曲なのか。はっきりしない。しかし、フアングが例に出すのは梁啓超「新羅馬伝奇」だ。すると戯曲になる。

フアングのこの説明によれば、魏易の名前を出して戯曲というのだから『吟辺燕語』についての説明にほかならない。伝奇が戯曲の意味ならば、『吟辺燕語』は小説だから当てはまらない。また、戯曲であれば戯曲の形に書き換える、ということになる。『吟辺燕語』を前にしては意味をなさない。奇妙なことだ。

では、伝奇が小説の意味であれば、戯曲を小説に書き換えることになる。

フアングは『吟辺燕語』がラム本の漢訳であることを知っている。林紓は、小説化されたものをそのままの小説に翻訳したにすぎない。底本が小説であり戯曲ではないにもかかわらず、どうして「in the case of dramas, to the conventions of *chuanqi*. 戯曲であれば伝奇の形に書き換える」と述べるのか。

ここから理解できるのは、フアングが従来からある俗説 戯曲を小説に書き直して漢訳したという固定観念から逃れることができていないことだ。

【フアング】According to Lin, while the two longtime collaborators sat leisurely at night, Wei “coincidentally mentioned a few entries from Shakespeare's notebooks,” which prompted Lin to “rush to the light to draft a translation.” It took him only twenty days to finish the book, which he identified as a collection of “chronicles by Shakespeare.”

It is noteworthy that in Lin's preface, Shakespeare not the Lambs was identified as the author. p.78

林によると、ふたりの長年の協力者が夜にゆっくりと座っていると魏が「ふとシェイクスピアのノートから1、2作を提示した」そうだ。林はそれに促されたように「灯火に身をよせ翻訳しはじめた」。わずか20日で完成し、彼はそれらを「シェイクスピアによる物語集」と称した。注目に値するのは、林の序言において著者としてラム姉弟ではなくシェイクスピアを指定したことだ。

【張擘】據林紓講述，他們兩人常在晚間閑坐，魏易有一次“偶拳莎士比筆記一二則”，林紓“就灯起草”，僅二十天就完成了訳稿，他把它称作“莎詩之記事”。值得注意的是，林紓在前言里指出原作者是莎士比亚，而不是蘭姆姐弟。55-56頁

下線部分をよく見てほしい。林序の原文、フアングの英語とそれの日本語訳を示す。

莎士比筆記 Shakespeare's notebooks
 シェイクスピアのノート
 莎詩之記事 chronicles by Shakespeare
 シェイクスピアによる物語集

原文に合わせて英訳しようとしたらしい。だが、後者は「莎詩」であるのに「Shakespeare」のみに置き換えるのは不十分だ。忠実な翻訳であるように見えて、その中身が不明であることを指摘されたらどうするのだろうか。「Shakespeare's notebooks シェイクスピアのノート」は何を指しているのか。筆記帳、手帳などに置き換えても意味不明であることは同じだ。英訳しながら理解していたのだろうかとは私は疑問に思う。

林紓はラム本には言及していない。しかし、20日で漢訳が完成したという。ラム本が20作品

を収録しているのと一致する。ここから見てもラム本を底本にしたことは明らかなのだ。

瀬戸博士も不確かな訳語しか与えていない。しかし裏の事情は違おうだろう。瀬戸博士のばあいは意図的なものだ。私が研究会でそれぞれの語句の内容はなにかと直接質問した。だが彼は個々の内容についてぐだぐだ言うだけで明確に答えることができなかった。のちの文章でもあいまいにしたまま訂正しようとはしない。私は数回の論文で同じように指摘したにもかかわらず瀬戸博士は一貫してすべてを無視した。林紓が区別できなかった「証拠」とするためにわざと不明確なかたちに放置したとしか考えられない。林紓が理解していないことにする印象操作である。

フアングは、致命的な誤解を表明していることになる。林紓はラムの名前は出していないが『シェイクスピア物語』について述べている。フアングにはその基本が理解できていない。ここでも林紓は戯曲と小説の区別がつかない、という先入観を持つために誤解したのだ。

林紓が莎劇(詩)とラム『シェイクスピア物語』を区別していることにフアングは気づくべきだった。以前から語り継がれている強固な俗説を自分で打ち破る知識と勇気がなかった。

クイラー=クーチが莎劇(詩)を小説化した事実を知っているか

これについて判別することは簡単だ。林訳シェイクスピアの底本にしたクイラー=クーチ本に言及しているかどうかが決め手である。

【フアング】Although Shakespeare's history and Roman plays were excluded from Lin's 1904 text, they were serialized as prose novels, also “translated” by Lin, in *Short Story Magazine* (*Xiaoshuo yuebao*) in 1916. p.7

シェイクスピアの歴史劇とローマ劇は

林の1904年の本からは除外されていたが、1916年林によって小説として「翻訳」され『小説月報』に連載された。

【張曄】雖然林紓1904年の版本中没有収録莎士比亞の歴史劇和羅馬劇，它們是以白話小説の形式連載於1916年の《小説月報》上，仍由林紓“翻譯”。序言7頁

奇妙な説明だ。1904年の林訳『吟辺燕語』は、ラム本だ。もともと歴史劇は収録されていない。1916年に漢訳されたのがクイラー＝クーチ本を底本とした作品だ。「translated 翻訳した」とカッコに入れたのは、莎劇を小説体に変えて「翻訳した」と考えているからだ。フアングもそれを漢訳した張曄もクイラー＝クーチの小説化本があることを知らない。

【フアング】Not only had Lin himself published rewritings of other Shakespearean plays as serialized novels and individual books, p.72

林自身がそのほかのシェイクスピア劇を書き換えた連載小説、単行本を発売しただけでなく、.....

【張曄】除了林紓發表的根據莎劇改写的連載小説和単行本之外，..... 52頁

上の『小説月報』掲載分と単行本のことをくり返している。林紓は底本の小説をそのまま小説として翻訳したのが事実だ。書き換えてはいない。別の箇所では具体的な作品名を掲げて説明はもう少し詳しくなっている。

【フアング】In 1916, he went on to “translate” more Shakespearean plays history and Roman plays that were not included in *An English Poet* in 1904 with Chen Jialin, who, like Wei Yi, orally rendered the plays into Chinese. Under transliterated

title, such as *Leichade ji*, Lin's renditions of *Richard II*, *Henry IV* and *Julius caesar* appeared in the *Short Story Magazine*, and *Henry VI* was published as a single volume with Commercial Press. These later works clearly identified William Shakespeare as the playwright, but it is not clear whether they were based on any specific edition. p.73

1916年に彼はシェイクスピア劇をさらに「翻訳」していった 歴史劇とローマ劇は1904年の『英国詩人』には含まれてはいなかった 魏易がしたように、陳家麟が口頭で戯曲を中国語に翻訳した。たとえば「雷差得紀」のように「リチャード2世」を翻訳し、「ヘンリー4世」「ジュリアス・シーザー」は『小説月報』に登場し、さらに「ヘンリー6世」は単行本として商務印書館から出版された。これらの後の作品はウィリアム・シェイクスピアが劇作家であることをはっきり示しているが、しかし、それらがどういう版本にもとづいているのかは明らかにされていない。(イタリック体は日訳ではカッコに入れた)

【張曄】1916年他繼續翻譯其他莎劇作品，包括1904年版的《吟辺燕語》中没有収録の歴史劇和羅馬劇，這次林紓的合作者是陳家麟，他和魏易一樣，為林紓把莎劇口訳成中文。《理查二世》、《亨利四世》和《朱利烏斯・愷撒》等劇本經他翻譯陸續發表在《小説月報》上，訳本の表題通常採用音訳的方式，如《雷差得^ㄩ紀》。

《亨利第六遺事》則由商務印書館以單行本的形式發行。這些後期作品都明確了劇作者是威廉・莎士比亞，却未交代訳者採用的是何種版本。53頁

『An English Poet 英国詩人』というのは『吟辺燕語』のこと。

フアングが林訳題名を使用したのは「雷差得紀 *Leichade ji*」のみ。あとは莎劇の原題を示した。張曄は、そのままには漢訳していない。「亨利第六遺事」だけは林訳どおりの書名になっている。なぜ「亨利第四紀」「凱徹遺事」を使用しなかったのか。また、「雷差得記[紀]」と漢字を間違えている。もうひとつ、フアングが“translate”と引用符をつけた「翻訳」には特別な意味を持たせている。つまり、戯曲を小説に変えて「翻訳」したということだ。張曄は、その引用符を使用していない。理由は不明。

フアング、張曄ともに林訳の底本がクイラー＝クーチであることを知らない。大きな問題である。次も同じだ。

【フアング】Lin also worked with an anonymous translator on *Henry V*, publishing it in the *Story World (Xiaoshuo shijie)* in 1925. p.73

林は氏名不明の翻訳者と協力して「ヘンリー5世」を1925年の『小説世界』に発表した。

【張曄】林紓還与一位不知名的訳者合作翻譯了《亨利第五記[紀]》，1925年發表在《小説世界》上。53頁

フアングはシェイクスピア研究の専門家なのだろう。アメリカの名誉ある学術賞を受賞しているくらいだ。ただし、林紓については知識が不足している。林紓が死去したのは1924年だ。上記の漢訳は死後の発表であることを説明してもよかった。張曄は英語が堪能であるのはわかる。だが、林訳題名の「紀」を「記」と誤記して正確な題名を書くことができない。林訳作品には不案内らしい。

細かいことだがフアングは林訳の底本の中に日本語、ドイツ語、スペイン語を含めている(p.75。【張曄】54頁)。日本語は蘆花『不如帰』を指しているだろう。しかし、林訳が底本

にしたのは英訳であって原文の日本語ではない。スペイン語はセルバンテス『ドン・キホーテ』だろうが、これも底本は英語だ。ドイツ語も同様。もしも『梅孽』の「(徳)伊ト森著」を言うのであれば、ドイツは誤記でありもとがイブセンだ。細かい部分が誤っている。林訳についての研究が十分ではないと思わせる。

次は孫艶娜の説明を見る。

【孫艶娜】Then in 1916 with the help of Chen Jialin, Lin Shu retold five of Shakespeare's original plays, namely, *Richard II*, *Henry IV*, *Henry V*, *Henry VI* and *Julius Caesar*. Unfortunately, he translated these plays once again in classical Chinese prose instead of the form of drama. pp.18-19

そうして1916年に林紓は陳家麟の助けによってシェイクスピアのもと戯曲の5作を書き換えた。すなわち、「リチャード2世」「ヘンリー4世」「ヘンリー5世」「ヘンリー6世」および「ジュリアス・シーザー」である。残念なことに、彼はそれらの戯曲を脚本の形ではなくもろいちど古代中国語の散文に翻訳した。

「ヘンリー5世」は、1916年ではなく1925年の発表だ。説明が正確ではない。

脚本のままではなく小説の形に改編して翻訳した。中国では「定説＝俗説」となっている説明をここでもくり返している。誤解は本当に根深いと感じる。シェイクスピア研究の専門家は、中国における林紓批判を疑うことなく信じているからだ。それに対して異論が提出されているという事実に気づいていない。

もとの英文博士論文は2008年にドレスデンで公表された。その時点でクイラー＝クーチの存在はすでに明らかにされている。中国大陸と異なりドイツのドレスデンではネットを経由して日本からの発信を受信できるだろう。その気が

あればだが。時間的に間に合わなかったというのであれば、范伯群「原原本本(二題)」(『書城』2008年8月号(総第27期))もある。単行本にする2010年までには参照する時間の余裕があったのではなからうか。(念のためにクイラー=クーチを紹介した次の書評がある。劉錚「【書評】林琴南の功臣(張治『中西因縁』)」『東方早報・上海書評』2012.11.25 電字版。さらに、「微瑕」部分のみの引用してウェブ上の「豆瓣讀書」2012.11.25に掲載)

小説化された底本があったことを知らないのは、専門書として致命的欠陥だと思う。林紘を理由なく貶めてはなはだしい。書き換えてはいないにもかかわらず戯曲を改編したと林紘に濡れ衣を着せているからだ。

結 論

入手した著作2種類は新しいと考えたから増補になるはずだった。ところが読んでみれば、前稿で検討した専門書だ。

シェイクスピアの専門家たちが、中国の初期漢訳2種類に収録された序を読んで解釈を誤っている。あらためて確認した。残念なことだといわなければならない。英文原書を漢訳して原著者の把握のしかたが見えなくなる箇所があることも判明した。

大きな構想を持った著作は、細部の正確さに支えられる。私はそう考えている。どんなに壮大な構想であろうとも、原文を誤読して細部が不正確であれば著作全体の構造を支えきれないのではなからうか。

フアング英文著作とその漢訳、および孫艶娜の英文著作には、戯曲と小説の「区別がつかない」という明確な表現は使用されていない。表面だけ見ればあたかも冷静に「事実」しか述べていない専門研究であるかのようだ。その「事実」が意味しているのは、林紘が戯曲を小説に書き換えたという従来からある俗説のことだ。研究論文に徹して厳密に記述しているように見

えるのは、かえって悪質であるということも可能だろう。明らかに間違っている俗説を継続支持して林訳批判を基礎部分で推進しているからである。彼女たちが公表しているのは正しくない解釈なのだ。客観的に見れば、自分たちの誤った認識を初期の漢訳者たちに押しつけること自体が、批判運動に加担していることを意味する。

さらにいえば、ヨーロッパにおいて英語で書かれた博士論文が中国でそのまま刊行される、またアメリカで出版された専門書が中国で漢訳された。林訳批判の書物が世界を循環してその正しくない評価が一層強固に定着するという状況を作り出している。中国の学界はいまだにその流れの中にある。 罫

【注】

- 1) 宋莉華『近代来華伝教士与児童文学的訳介』上海古籍出版社2015.11 中西文学文化関係研究叢書。287頁「他(林紘)对莎士比亞戲劇并不了解,不知道此書(『吟辺燕語』)為蘭姆姐弟的改編本」
- 2) 周羽「林訳《吟辺燕語》的誤解与魅力」袁進主編『中国近代文学編年史 以文学広告为中心(1872-1914)』北京大学出版社2013.5。179頁。写真は同書からの引用。また、[編年 746][編年 2597]にも光緒三十年八月初一日(1904.9.10)の広告文を収録する。略号について樽目録を参照のこと。
- 3) 「自修課程/Tales from Shakespeare "Tempest"。/商務印書館説部叢書中之《英国詩人吟辺燕語》,蓋即訳此書之事實者也」注釈番号は省略。呉宓著、呉学昭整理注釈『呉宓日記』第1冊(1910-1915)北京・生活・讀書・新知三聯書店1998.3。123頁
- 4) 東潤(朱世溱)「莎氏楽府談」より2ヵ所を引用する。「後有林氏述其事迹為莎氏楽府本事。吾国林琴南訳之。則称为吟辺燕語」『太平洋』第1巻第5号1917.7.15。2頁 / 「林氏吟辺燕語訳自英人林穆之莎氏楽府本事原書」「莎氏楽府談二」『太平洋』第1巻第6号1917.8.15。1頁
- 5) 樽本「漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序

- 「区別がつかない論」再び』『林紓冤罪事件簿(総合増補版)』清末小説研究会2017.1.15 電子版
- 6) 欧陽健「福州近代文化巨人林紓在民国」『閩江学院学報』第28巻第6期2007.12
- 7) 張俊才+王勇著『頑固非尽守旧也: 晩年林紓的困惑与堅守』太原・山西出版伝媒集团、山西人民出版社2012.1。ほかの論文については樽本「中国現代文学史における林紓の位置」、「『吟辺燕語』批判の謎」を参照。
- 8) 陳歴明「莎劇最早的漢訳本: 《海外奇譚》」『外国語(上海外国語大学学報)』第39巻第1期2016.1.20。88、89頁
- 9) 孟憲強『中国莎学簡史』長春・東北師範大学出版社1994.8
- 10) 李偉民『中国莎士比亞批評史』北京・中国戯劇出版社2006.6
- 11) 「叙例」の全文は、影印本で読むことができる。また、『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学集三(上海書店1991.4)に収録される。しかし、Shakspere を書き改める。前述宋莉華が284頁に引用する。瀬戸博士『中国のシェイクスピア』66頁に部分翻訳がある。漢訳した陳凌虹本『莎士比亞在中国』56頁は原文を引用するが Shakspere を書き改め、もとの「命」を「名」に誤る。
- 12) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29
- 13) (日) 瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国: 中国人的莎士比亞接受史』広州・広東人民出版社2017.1

袁国興主編『清末民初新潮演劇研究』

広州・広東人民出版社2011.1

創話劇之新声: 重探春柳社編演《茶花女》選段

.....蔡	祝青
文明戲“連台本戲”劇目考及其特徵向陽
“戲中有演説”与話劇範型的体識張軍

次号の公開は2018年1月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

漢訳リサール辞世詩 2

魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪

荒井由美

8 リサール辞世詩の日訳と漢訳

魯迅は、清朝末期だと時間を特定してリサール辞世詩の漢訳があると述べた。1911年以前に漢訳が発表されていたことになる。

結論めいたことを先に述べる。魯迅が読んだ可能性のあるリサール辞世詩の翻訳複数を以下に掲げるが、それらの中からひとつだけを指定するのは困難だ。あくまでも可能性があるという段階に止まる。それくらい多様な翻訳が発表された。

中国人研究者、あるいは中国系フィリピン人研究者の視界から完全に欠落している部分がひとつある。無視できないものを無視している。それは、リサールやボンセたちが滞在したことのある日本だ。

ボンセはフィリピン独立軍から派遣されて日本で武器弾薬調達に活動に従事していた。1898年以後のことだ。その関係で日本の政治家、民間の援助者と多数の親交があった。宮崎滔天からは「本君(ボンくん)」(『三十三年之夢』岩波文庫、324-325頁)と呼ばれていたくらい親しかった。この人間関係の中には孫文もふくまれている。また、妻が日本人女性であることも知られる。

リサールの親友ボンセが無題の辞世詩を受け

取り香港で公表したのであれば、ポンセこそがスペイン語題名「我が臨終の感想 MI ÚTIMO PENSAMIENTO.」の名づけ主であっても不思議ではない。事実そうだった。また、日本で翻訳刊行された『南洋之風雲』(1901)の原作者がポンセなのだ。

多言語を使いこなす能力を持つリサールは、1888年に日本を旅行したことがある。横浜からアメリカ経由でヨーロッパに渡るのだ。彼は日本滞在中に末広鉄腸(重恭)と知りあった。鉄腸はリサールを主人公にする小説を書いた。押川春浪の小説にもリサールが登場することは有名なことだ*19。そのリサールにも日本人女性の恋人がいた。

以上のように日本ではリサール、ポンセに関連する書籍も出版されている。中国、フィリピンの研究者がそれに言及しないのは意外な気がする。

前述のとおり、リサール辞世詩が世に出たいきさつを見てもポンセの存在は重要な意味をもっている。そのポンセ原作『南洋之風雲』は、「ドン、ホセー、リサール氏伝」にページを割いている。辞世詩も収録する(全部で152-165頁)。ここは重要どころだ。

リサール辞世詩が日本においてかなり早くに翻訳されていることに注目してほしい。時間的に見れば最初はスペイン語とその日本語翻訳が同じ刊行物の中に出現した。つぎに漢訳された。そういう順序である。魯迅が日本に留学していた時期とほぼ重なるのだ。以下に示す略号は、本稿「附録：リサール辞世詩の翻訳対照表」と共通する。

略号は【宮本】

(比律賓)マリアーノ・ポンセ MARIANO PONCE 著、宮本平九郎、藤田季荘共訳『南洋之風雲：比律賓独立問題之真相』博文館1901.2.23。扉は「MARIANO PONCE / CUESTION FILIPINA. / 比律賓 マリアノポンセ著……」。以下『南



洋之風雲』と称す。

『南洋之風雲』は、「フィリピンでは宝典として珍重されている」(木村毅「ホセ・リサールに関する日本文献」『ホセ・リサールと日本』後ろから2頁)という。

木村が1940年代のフィリピンにおける体験談『南の真珠』*20を書いているからその部分を引用する。

或る時、マリアノ・ポンセに関する話をしてみると、彼(注：ホセ・バンツグ Jose P Bantug)はポンセが日本で出版した書物がある筈だと云ふのだ。それは博文館から明治三十四年頃出た「南洋の風雲」といふので、私は何かの役に立つかも知れないと思つたから、鞆の底に持参してゐたので、取出して示した。/ 『あつ、これだ、これだ』とバンツグ氏は眼の色を変へて云ふのだ。/ 『これが比律賓には、破本が一冊国民図書館

にあるだけだ。多分、それはボンセ自身の所有書だったものだろう。こんなに新しい、完全なのは、残念ながら、この国にはないのだ』 / と云つて、手ばなしかねるやうにする。273頁

考えるに、印刷物としては日本語に翻訳された『南洋之風雲』しか存在しないからだろう。ボンセは最初から日本人を想定してスペイン語で原稿を書いた。出版にいたる経過は不明だ。私の推測だが、ボンセは原稿を知人である宮本に直接送ったのではなからうか。あるいは手渡したか。その後、スペイン語のまま、または英語に翻訳のうえ出版されたことはなかったらしい。2017年4月現在調査した結果、スペインとフィリピンあるいは英国図書館の所蔵目録には日本語訳の『南洋之風雲 CUESTION FILIPINA』そのものしか掲載していない。原稿が残っていると聞かない。だからこそ「珍重されている」

該書には、リサール作「我が臨終の感想 MI ÚTIMO PENSAMIENTO.」が、スペイン語(159-161頁)と日本語訳「臨終の辞」(162-165頁)の両方で収録される。

このマリアノ・ボンセこそリサール辞世詩が世に出てくる際に重要な役割をはたした人物だった。

1897年、香港においてボンセは無題のリサール辞世詩に題名「MI ÚTIMO PENSAMIENTO. [我が臨終の感想]」をつけて1枚物の印刷で配布した*21。

そういう経緯がある。そのボンセが書いた『南洋之風雲』なのだ。これに掲げられたスペイン語のリサール辞世詩そのものの信頼性は高い。

リサール辞世詩は、本文の説明では「我が臨終の感想」となっている。訳者の宮本らはそれを「臨終の辞」と題して日本語に翻訳した。訳者識として「茲に唯原詩の意を万一に髣髴たらしめんことを期するのみ、読者乞ふ諒せよ」と

ある。

前出柳田「日本文学におけるホセ・リサール」から引用する。

この書(注:『南洋之風雲』)は、いわばヒリッピン独立運動史ともいってよいので、独立運動について、その由来、原因、経過、それに貢献した志士義人、運動の現状などを歴史的、批評的に論評した実に貴重な文献である。そうしてリサール関係からいえば、志士小伝の中で、彼の正しい伝記が比較的詳しく紹介され、独立運動史上の立場とともに政治小説『ノリ・メ・タンヘレ』、『エル・フィリフステリスモ』の内容の大略も語られたことは、大きな喜びであった。中でも、その「わが臨終の感^マ」という最後の詩が全文(原文訳文とも)掲げられて、日本の読者にいいようのない感激を与えたものである。66-67頁

『南洋之風雲』の刊行は、リサール辞世詩が日本で知られる契機となった。

第1連のスペイン語原詩(参考までにその日訳をそえる。出典については附録を見てほしい)および宮本訳を示す。1連5行の原詩をどのように反映しているのか。可視化するため宮本訳には筆者による改行を施す(以下同じ)。

Adios, Patria adorada, region del sol querida,
さようなら、愛する祖国、なつかしい太陽の地よ、
Perla del Mar de Oriente, nuestro perdido Eden!
東洋の真珠、今はなきわが樂園よ!
A darte voy alegre la triste mu}stia vida,
喜んで、君に捧げよう、貧しく萎びたこの命を、
Y fuera más brillante más fresca, más florida,
いや、たとえ輝きにみちていて、いっそう清らかで、花咲くような私であったとしても、

E[*T*]ambien por ti la diera, la diera por tu bien.

やはり、君のために、この命を捧げよう、君の
しあわせのために、この身を捧げよう。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し
東海の真珠に比ぶなるエデンの楽園と思ひしに、
我は今汝を跡にして逝かんとす。惨怛たる我生
命は

汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光栄
あれば

尚汝の前途を守護せむに。(汝とは本国を指す
以下皆然)

宮本の日訳は、少しの省略と前後語句の移動
はあるにしてもほぼ原文どおりになっている。

これは東京時代の魯迅が読む可能性のあった
日本語作品のなかのひとつだといっている。



『あぎなると』

略号は【美妙】

魯迅がリサールの小説を山田美妙訳『血の
涙』(1903)で読んでいたことは本稿の注で説
明した。ならば、同じ美妙がフィリピン人アギ
ナルドを主人公にした『(比律賓独立戦話)あ
ぎなると』前編(内外出版協会1902.9.11 / 9.21
再版)を見ている可能性を否定できない。該書

は、かなりの分量を割いてリサールの生涯を紹
介する。また、辞世詩全部が美妙調に翻訳され
ている。リサール作、山田美妙訳「わが末期の
おもひ」(180-187頁)である。宮本訳を底本に
して再創作、つまり作り直したものだだろう。

その第1連を参考までに引用する。

【美妙】ひさかたの

天のめぐみのいとあつき

あゝわがみくに、此みくに、

さてもいつくし東海の

かゞやく真珠、イイデンの

花のみそのに比ぶべき

そを今われはあとに見て

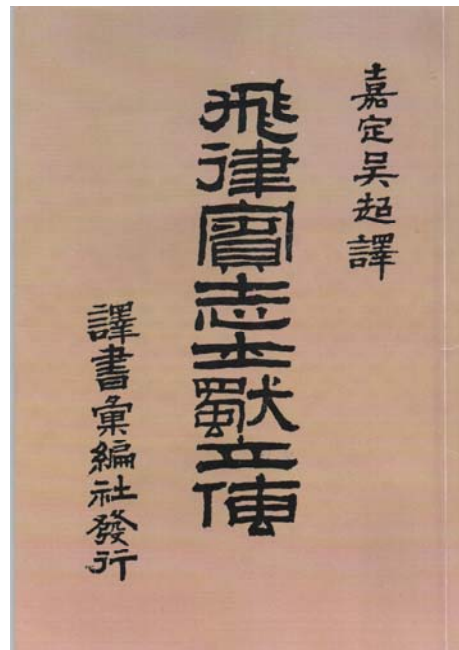
死ぬをうれしと云ふ迄に

なりぬる身かな、なりし哉。

リサール原詩は宮本訳をへて美妙の工夫によ
り日本調に再度翻訳されたことがわかる。

略号は【呉超】

(比律賓) 崇昭本西著、(嘉定) 吳超訳『比
律賓志士独立伝』(表紙は「飛律賓志士独立伝」。
目次、本文が「比律賓志士独立伝」) 日本・訳
書彙編社 明治三十五(1902)年十月十日 / 光
緒二十八年九月九日発行 影印本



題名が表紙と本文ほかで異なるのは、当時はよく見られる。本文の表記である『比律賓志士独立伝』を使用する。

漢訳者の呉超は、原作者の名前を本西(ポンセ)と明示する。だが、宮本平九郎、藤田季莊共訳『南洋之風雲』博文館(1901)を省略した。底本について明記しない、このように説明が不足するのは、当時においては別に珍しいことではない(後述)。

日本東京で刊行された。該書が読者として想定しているのは、当然ながら日本滞在中の中国人および中国大陸の知識人であることはいうまでもないだろう。

漢訳ではポンセに「本西」の2字を当てた。呉超は、滔天のいう「本君(ポンくん)」を知っていたようだ。あるいは、直接の接触があったのかもしれない。

調査の結果すでにその底本が前述のとおり『南洋之風雲』であることは確認した。しかし、全訳ではない。底本所収の写真はもとより本体、つまり主要部分ははびいている。「附録 志士列伝」だけを翻訳するというやや変則的な刊行物だ。そうした理由は不明。

また、著者である「ドン、マリアーノ、ポンセ氏伝」をなぜ省略したのか。この「志士列伝」に含めてもよかった。本体なしで附録だけの漢訳という点に不満はある。しかし本稿に関していえば、列伝の中にリサール伝が収録されていることに注目すべきだ。「利刹乎羅氏伝」である。しかもリサール辞世詩は、その中に「臨終之感想」として掲載された(14-16頁)。題名は宮本が示した「我が臨終の感想」をそのまま漢訳したものだ。

比較対照するため再度宮本の日訳を示したうえで呉超の漢訳を見る。

【宮本】最愛の本国よ。天恵に浴し
東海の真珠に比ぶなるエデンの樂園と思ひしに、
我は今汝を跡にして逝かんとす。惨怛たる我生

命は
汝のために捨つるを喜ぶ。我生にして多く光栄
あれば
尚汝の前途を守護せむに。(汝とは本国を指す以下皆然)

【呉超】最愛之本国兮。浴天恵
比東海之真珠。思恵定之樂園兮。
念本国而不止。惨怛我之生命兮。
去本国而有何喜。我生而多光栄兮。
尚守護本国之前途。

リサール原詩の Eden は日本語に訳されて「エデンの樂園」になった。呉超はそれを「恵定之樂園」に漢訳した。直訳である。ちなみに現代漢語では「伊甸園」と表記する。

宮本が注記した「汝とは本国を指す以下皆然」は漢訳にはない。その理由は、リサール原詩、すなわち宮本日訳に見える「汝」を呉超は宮本が示した「本国」に置き換えたからだ。注記する必要がなくなった。

「本国」にしたことを除けば、呉超訳はほぼ逐語訳になっていることがわかる。リサール辞世詩の漢訳として呉超のものは当時、広く知られていた可能性がある。ただし、多くの漢訳を収集している『黎薩爾与中国』に言及がないことをいぶかる。現在ではまったく忘れられているらしい。もともなったポンセ『南洋之風雲』が記録から脱落してしまっているからその漢訳も同じ運命にあったということか。

呉超は該書の一部分を漢訳しただけだった。全訳したものが別に存在する。

略号は【同是】

つぎで紹介するのは、ポンセ原作『南洋之風雲』の全訳だ。上海・商務印書館が刊行した。

初版と改訂版がある。目録風に示す。ただし、ポンセ原作については重複するから省略する。

まず初版から。



孔夫子旧書網より引用

飛獵濱獨立戦史

飛獵濱棒時著 中国同是傷心人訳

上海・商務印書館 光緒28(1902).11首版 戦史叢書1=3

[樽本C][実藤400]飛獵濱棒時著『飛獵濱獨立戦史』商務印書館 光緒28年(1902)活版 戦史叢書1集3編。

孔夫子旧書網に写真あり。線装本。題簽は戦史叢書/飛獵濱獨立戦史、扉は飛獵濱獨立戦史/戦史叢書第一集第三編、本文に飛獵濱棒時著、中国同是傷心人訳。奥付は、訳述者：東京留学生、上海・商務印書館、光緒二十八年十一月首版

[中日730.250]宮本平編、戦史叢書第3編[中日730.251]戦史叢書1集3編。首都図書館所蔵 棒時、同是傷心人『飛獵濱獨立戦史』商務印書館 光緒二十八(1902) 戦史叢書第1集。また、天津図書館所蔵 (菲律賓)棒時撰『飛獵濱獨立戦史』商務印書館 光緒二十七(1901)。中国国家図書館所蔵 中国同是傷心人訳『飛獵濱獨立戦史』商務印書館 光緒二十七(1901)

図書館の所蔵目録によれば、1901年の初版がある。1901年が正しいとすれば、呉超漢訳よりも先行する可能性が出てくる。はじめは単体で刊行され、のちに「戦史叢書」に収録された

考えられないこともない。しかし、該版は確認することができないためあくまでも推測にとどまる。1902年版は、東京都立図書館実藤文庫に収蔵。また、孔夫子旧書網の写真で部分を見ることができる*22。

著者と漢訳者の表示から、飛獵濱の棒時(ボンセ)に対して中国の同是傷心人が対になっている。

傷心人だけならば麦孟華の筆名だ。別に曼殊、曼殊室主人もある。康有為の弟子。若くして梁啓超とともに有名で「梁麦」と呼ばれた。戊戌政変後日本に逃れ梁啓超を助けて『清議報』に文章を発表した。また大同高等学校の校長をつとめる。『新民叢報』に執筆。その麦孟華が日本滞在中に漢訳したとすれば時期的には合致する。ただし、同是傷心人が麦孟華であるという確証は今のところ、ない。奥付は「訳述者：東京留学生」とする。それとあわせて「同是」をつけているところを見ると、麦孟華に近い人物の筆名かもしれない。

原作者のボンセ(棒時)を出すのは当然のことだ。しかし、それを日訳した宮本平九郎と藤田季荘の名前がない。しかも、原題の『南洋之風雲』もなければ、発行した博文館と刊年も書かない。つまり、基づいた底本について説明しない。現代から見れば不十分な記述に見えるだろう。しかし、清末時期において翻訳作品が底本の存在を無視するような扱いをすることは珍しいことではない。該書の表示に関しては呉超漢訳のところ触れた。底本に言及しないのは、言ってみればまことにありふれたことなのだ。そういう時代だった。

たとえば同時代の周氏兄弟による翻訳がある。

魯迅は、『(科学小説)月界旅行』を中国教育普及社で刊行した。1903年のことだ。原著者、訳者の表示が本文と奥付とは異なる。本文は「美国 培倫原著/進化社訳」、奥付は「美国 培倫原著/中国教育普及社訳印/発行所：進化社」だ。ヴェルヌの漢訳が1字違い。訳者名が



影印本

異なる。統一のない表示といえよう。

なぜヴェルヌがアメリカ人になっているかといえば、底本にそうあるからだ。井上勤訳『(九十七時二十分間)月世界旅行』(1886)は英訳を底本に使い日訳して「米国ジユルスベルン氏著」と表示した。ただし、表紙、奥付などに日訳者井上勤を記載しない。わずかに「辨言」において「月界旅行原書。為日本井上勤氏訳本。……書名原属「自地球至月球在九十七小时二十分間」意」と説明するのみ。井上勤の名前を出しただけましというもの。『浙江潮』に途中まで連載した「地底旅行」では「(英)威男著」と記す。イギリス人とするのも依った日訳をそのまま漢訳しただけ。底本の明示はない。

周作人『(言情小説)匈奴奇士録』(1908)は、「(匈牙利)育珂摩耳(ヨーカイ・モール)著」とのみ示す。底本は英訳だが、その英訳者名を書かない。しかも、後に周作人はその英訳者名をペイン(ROBERT NISBET BAIN)だと記述した。記憶違いである。しかし、研究者は、周作人の文章を疑わず検証せず引用し続けた。長年にわたって底本を探し当てることができなかった理由である。英訳底本の訳者がピックネル(PERCY FAVOR BICKNELL)であると明ら

かにしたのは、2014年の日本においてであった。1世紀以上の時間が経過しているではないか。

よく知られた例をもうひとつ紹介する。

林紓+魏易共訳『英国詩人吟辺燕語』だ。漢訳題名はそのまま「シェイクスピア戯曲物語」である。しかし、莎士比(シェイクスピア)著とだけ書いて底本としたラム姉弟の名前を出していない。清末という時代において、周氏兄弟がやったのと同様に普通に見られることだ。

隠れた底本を明らかにする。それが研究者の仕事だろう。その役割を最初から放棄する人がいるのも事実だ。林紓を批判するために、ラム姉弟の名前がないその表面だけをつかんで根拠にする。その人は、清末の翻訳は底本を明らかにする習慣がなかったという実状について無知であることを自分から認めたことになる。すすんで自爆するのはなぜか。私の理解をこえているといわざるをえない。

さて、底本の「序」は「飛獵濱独立戦史序」にしている。もともと宮本が漢文で書いた。だからこちらの序もほぼそのままだ。ただし、語句の一部に変更がある。例をあげれば、国名を書きかえる。宮本の漢文は国名については日本語である。露(ロシア)、独(ドイツ)、支那、米合衆国(アメリカ)、比律賓(フィリピン)、英(イギリス)、仏(フランス)などを使う。呉超は漢訳せずにそのままにしていた。同時傷心人は、それらを俄、徳、中国、美合衆国、飛獵濱、法に置き換える。そう漢訳した。ただし、英がそのままであるのは、日本語と漢語が共通するからだ。

該書を漢訳していくつかの変更がある。

以下の文章などは削除された。「例言」「ドン、マリアーノ、ボンセ氏伝」「比律賓独立軍々歌(其一)(其二)」「比律賓独立軍国家訳」「写真31葉」「比律賓群島全図」などだ。

1902年といえば商務印書館と金港堂が合併することを前提に業務提携を準備していた時期だ。当時、商務印書館には写真版を作成する技術を

まだ持たなかった。写真31葉が削除された理由だろう。

本文は全14章ある。附録の「志士列伝」もそのままだが、最後部分の「名士追録」は漢訳されていない。

本稿の主題であるリサールについてはどうか。底本の「ドン、ホセー、リサール氏伝」は漢訳されて「利沙魯氏伝」である。

呉超がリサール名を漢訳して「利刹乎羅」だった。両者は明らかに異なる。異なるとはいえリサールを表わしていることに違いはない。

リサールが多くの外国語に通じていたと説明する。母語はタガログ語だ。そのほかスペイン語、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語という。日本語学習についての説明は底本の宮本訳を含めて3種類を引用する(傍線省略)。

【宮本】極東なる日出帝国の文芸美術を慕え為めに日本語を修む。153頁

【呉超】極東慕日出帝国之文藝美術。為修日本語。10頁

【同是】慕日本之文藝美術。又脩日本語。5丁オ

宮本が日本を「日出帝国」と表記すれば、呉超はそれをそのまま受け入れた。呉超漢訳は、文章自体も日本語にひきずられてほぼそのまま。翻訳らしさが薄れており読んだ中国人は理解に苦しんだのではなからうか。同是傷心人は、そこは避けてただの「日本」に漢訳した。全体を見ればこちらの方がわかりやすい漢訳だ。

さて、リサール辞世詩である。これが期待はずれだった。辞世詩を示す直前の部分を引用する。

【宮本】氏銃刑に處せらるゝ前数日獄内に於て
ミ ウルチーモ ベンサミエント
Mi Ultimo Pensamiento (我が臨終の感想)を賦して懷を遣れり。之を読んで誰か感憤一掬の涙を賤かざるものぞ。歌に曰く、(注:このあとスベ

イン語原詩と日訳が続く)158頁

【呉超】氏處銃刑之前数日。於獄中賦有詞。因觸臨終之感想。而以此遣懷者。凡有志之士讀之。誰不為之一掬其淚哉。其詞曰。(注:このあと漢訳が続く)14頁

【同是】利氏處銃刑之前数日。曾於獄内賦詩遣懷。至今讀之。尚覺沈沈悲憤。淚血俱下也。其終身之大目的。不外以其身為飛獵濱人作犧牲。争獨立耳。7丁オ(リサール氏は銃刑の数日前、獄内において詩を作り胸中の思いを述べた。今、それを讀むと深い悲しみと怒りを感じ血涙がともに出てくるのだ。彼の終身の大目的は、フィリピン人のために身を犠牲にし独立を争うこと以外にはなかった)

同是傷心人は明らかに文章を書き換えている。その結果がリサール辞世詩の削除だ。呉超が日訳を忠実に漢訳して「臨終之感想」全部を収録した事実とどうしても比較してしまう。同是傷心人によるリサール辞世詩の未訳は残念な処置であった。

ついでだから、同是傷心人の文章が以下に無断借用されていることを指摘する。

華亭雷瑯輯『各国名人事略』(上海・掃葉山房 光緒三十一(1905)年正月再版)「利沙魯」(巻10志士5オ)である。これには「利氏處刑之前数日。曾於獄内賦詩遣懷。至今讀之。尚覺沈沈悲憤。淚血俱下也」(巻10志士6ウ)という文章がある。同是傷心人『飛獵濱独立戦史』の上記箇所と見比べれば「銃」がないだけで同文だ。

後の改訂版は、約10年後に出てくる。これも簡単に紹介したい。同じく目録風に示す。

菲利濱独立戦史

商務印書館編訳所訳

上海・商務印書館 辛亥(1911).10初版 / 1913.10三版

『飛獵濱独立戦史』1902の改訂版

孔夫子旧書網に写真あり。上海・商務印書館 辛亥(1911)年十月初版 / 中華民國二年十月三

版[樽本C]商務印書館編訳所訳『菲利濱独立戦史』商務印書館(奥付破損)影印本。「菲利濱独立戦史序」の署名は「辛亥十月。緑天居士。據旧本校改刊行」[涵歴17]『斐利濱独立戦史』本館(商務印書館)清宣統辛亥十一月(1911)[阿学201]『菲律賓独立戦史』商務版、1911刊[阿辛175]『菲律賓独立戦史』商務版、1911刊[述略149]『飛獵濱独立戦史』商務版、1911刊。天津図書館所蔵、商務印書館編訳所訳『菲律賓独立戦史』1913。また、首都図書館所蔵1911刊、中国国家図書館所蔵1913刊



孔夫子旧书网より引用

書名が初版と改訂版とでは異なる。フィリピンの漢訳が変化した。清末の『飛獵濱独立戦史』が中華民国直前になって『菲利濱独立戦史』に変更された。

原作者ポンセの名前はない。訳者は同是傷心人ではなく商務印書館編訳所訳に変更された。初版に日訳者と題名が不記だから、この改訂版にも記載はない。

宮本「序」は、初版では「明治三十四年歳次辛丑一月日本宮本平序」だった。改訂版では書き換えて「辛亥十月。緑天居士。據旧本校改刊行」とする。それを見れば緑天居士が筆をとって該書全体を修改したように読むことができる。ただし、緑天居士については不詳。同じ号を持

つ陳石瀬がいるが別人。年齢があわない。

初版は底本『南洋之風雲』所収の写真を収録していなかった。改訂版は、初版とは異なる写真3葉を掲げる。では、緑天居士は『南洋之風雲』を見ていないのかといえ、そうとは断定できない。

初版では省略した「ドン、マリアーノ、ボンセ氏伝」だ。呉超漢訳、同是傷心人漢訳にも収録されていない。だが、この改訂版では、附録「菲利濱独立志士伝」の冒頭に「棒時氏伝」と題して漢訳掲載している。ただし、目次には表示しない。初版では省いたものを改訂版では漢訳のうえ収録している事実がある。ポンセ原著『南洋之風雲』を見ている証拠になる。

残念なのは、改訂版でもリサール辞世詩が省略されたことだ。

時間の順に見ていけば、次が馬君武だ。 罫

【注】

- 19) 柳田泉「日本文学におけるホセ・リサール」木村毅編『ホセ・リサールと日本』アポロン社1961.6.10。木村毅「第3章 ホセ・リサールと日本文学」『日本に來た五人の革命家』恒文社1979.5.30 / 12.31第二刷。花野富蔵「比島の志士ホセ・リサール」『日本文化』第79冊 日本文化協会1942.6.1
- 20) 木村毅『(マニラ紀行) 南の真珠』全国書房1942.10.30
- 21) 前出 Miguel A. Bernad, "The Nature of Rizal's Farewell Poem", p. 192
- 22) 鄒振環は「《法国革命戦史》与「戦史叢書」」(『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社2000.9。110頁)において、訳者について「中国国民叢書社訳」と書いている。間違い。また、潘喜顔『清末歴史訳著研究(1901-1911) 以亜洲史伝訳著为中心』(復旦大学博士論文 2011 電字版。48頁)も同様。これも間違い。171頁に「5-033-205《飛獵濱独立戦史》,【飛獵濱】棒時撰,東京留学生訳」と書いているのに一致しない。日訳に言及しないことも鄒振環と同じ。

『瑞西独立警史』について3完
漢訳「スイス独立史」

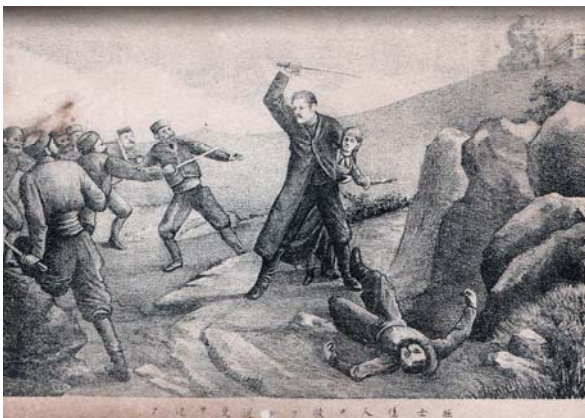
沢本香子

元氣第8回 - 警史第8回

壮士ウイルニーは、状況知らせに雪の中を行った。途中で母子が出てきているのを見かける。母子の会話で娘が壮士ウイルニーに恋慕していることを細かに比較的長く描写する(72-73頁)。『警史』はそれらを無視した(49頁)。漢訳はこうしてページが圧縮される。

悪代官ランデンベルクの部下5、6人が娘を襲った。壮士ウイルニーが駆けつける。左腕で娘をかばい5、6人との斬り合いになる。

日本『元氣』に置いた挿絵を示す。題して「壮士佳人を救フテ逆吏を追フ」である。本文は雪中であるはずだが、挿絵には雪が見えない。壮士ウイルニーの服装、刀を振り上げた姿勢に違和感がある。小さなことだ。



「壮士佳人を救フテ逆吏を追フ」

そこに来合わせたワルテルとホウムガルテンが助勢してきた。『警史』は細部を省略しつつ大筋のところをふまえて物語を続ける。悪者を撃退し、ワルテル、ホウムガルテン、壮士ウイルニー、レジnkの妻子(娘の名前は慧利那)が時間を前後してここに集合した。レジnkが捕まったことを母子に話すことはできなかった。追っ手が迫る危険があるため男ら3人はルートリーをめざして出発した。

元氣第9回 - 警史第9回

ルートリーには、先に到着していたアルノルトがいる。合流したワルテルと壮士ウイルニーたちを称して日本『元氣』は「三傑」(95頁)という。『警史』にはその表現がない(59頁)。3傑のなかから「議長」を選出することになりワルテルが推挙された。彼が皆に説くのがスイス人の独立精神である。長い演説のなかの1節を引用する。

夫れ人にして束縛圧制を受けて自由権利なきときは恰も蛻売と一般にて精神なきものなり。既に精神なくんば誰れか之を生者と為せん。諸君よ鴻毛泰山死は一なり何ぞ精神を励まし蒼天に千古を経て滅びざる権利を得んと欲し給はざる。若し精神を励まし求むるも平和手段にて得難くば剣こそ権を得るの方便なり。97-98頁

「売」は「殻」と同じ。抜け殻のこと。「鴻毛泰山死は一なり」は、いうまでもなく重い軽いの違いはあっても人は死ぬものという意味。上に引用した部分は、スイス人の自由を強く求める気概を説明している。

『警史』は、逐語訳にはしていない。上に該当すると思われる部分を次に示す。

夫奴隷而生孰若自由而死。苟得自由雖死無憾。況奴隷未必得生。自由未必即死乎。

諸君諸君。今日我輩當拚此生命為我国人民於万死中求一活。使天誘其衷。權奸受命。則吾等當遂共和施政。獨立自治。永脱他人之羈絆。諸君勉旃。61頁

奴隸として生きるくらなら自由の身で死んだほうがました。自由を得るのであれば死んでもかまわない。ましてや奴隷が必ずしも生きるとは限らないし、自由であれば死ぬともかぎらない。諸君、今日われらはこの生命を捨ててわが国人民のために万死の中にひとつの生を求めるのだ。天の意志で奸悪な権力者が任命されたのであれば、われらは共和の政治を行ない独立自治によって他者の束縛から永遠に逃れなければならない。諸君、勉めよ。

漢訳は底本を離れている。かなり自由に書き換えた。

ひとつ指摘する。ワルテルが議長になってある場所に立ち演説をはじめ。その場所とは「木片を交叉したる圏内」(96頁)だという。ここに割り注がある。「木片ヲ交叉シタル圏ノ内八当時ノ議席ナリ」という。こういう細かな説明は、谷口が独自に考案したようにも見えない。別の底本が存在していることを示唆しているのではなからうか。

ワルテルが具体的に提案したのは、敵の羅斯ロスベルグ城と哈不斯堡ハウスブルク(又の読みはハプスボルク)城を奪うことだった(日99頁/漢61頁)。

明年第一月一日(明年正月朔旦)を蜂起の日を決めた。

日本『元氣』は以上をもって前編が終了する。『警史』はそのまま第10回へ続く。いままでのところ漢訳は大きな削除が1カ所あるだけでほぼ底本のままをなぞってきている。日本『元氣』は本文20回だ。『警史』は翻訳部分が16回しかない。漢訳の回数少なさは、第10回以下をみればその理由が判明するだろう。

元氣第10回 - 警史第10回

悪代官ゲスラ - の館。彼はワルトルの演説をスパイしていた方巴斯からの報告を聞いた。アルノルトは水中に消えた。腹心の部下蘇滑多^{スワツタ}が言うには、アルノルトが少女梨姿^{リシユ}を連れて逃亡したと(日3頁/漢64頁)。

第2回に登場した少女の名前がリシーであることがここで明かされる。

悪代官に刃向かう人物をあぶり出すための策が知らされる。ゲスラーの帽子を竿の先につけ、それに平伏して拝めと人々に命じる。

獵師ウィリアム・テルが登場する。「^か那の瓦爾徳が継子なる布爾古連^{ふるごれん}の維廉剔爾^{ワイルヘムテル}」(5頁。既述のように6頁以降では「惕爾」と表示される)である。「ふるごれん」は、シラー戯曲の「ビュルグレン Buerklen」に相当する。テルが生まれたとされる村だ。漢訳は「維廉惕爾」とだけあって「布爾古連」は省略する(66頁)。意味不明だと判断したためか。

ウィリアム・テルは、帽子を無視する。捕らえられる。妻子をこの場に引きたてる。悪代官ゲスラーは息子の頭にリングを置いてテルに射るよう命じる。

「弓に矢をつがひ満月の如く引しぼり」(7頁)とある。谷口は弩(ど。クロスボウのこと)にはしなかった。日本はいざしらず中国には古代から使用されていた種類の武器だ。漢訳は「弓」とだけにしてその形状には触れない。テルはリングを射落とした(68頁)。

よく知られているようにテルが準備した矢は2本だった。手元に残った1本を見とがめられ、失敗したときは悪代官ゲスラーを殺すつもりだったと白状する。ただちに捕らえられた。日本『元氣』でも、そうになっている。

ところが、『警史』では異なる。リングを射落としたあとにテルは奇妙なことを言い出す(日本語訳は改行する)。

惕爾曰。願更得一矢。却土動疑之曰。汝欲更得一矢。將何用。惕爾大声曰。咄暴人。汝欲害人子。吾欲更得一矢。用以射汝。報吾兒之仇。68頁

テルは「矢をもう1本所望する」といった。

ゲスラーはいぶかりたずねた。「お前はもう1本矢が欲しいというのが何に使うのだ」

テルは大声でいった。「フン、悪人め。お前は人の子を殺したがった。おれがもう1本の矢を所望するのは、お前を射ておれの子供の復讐をするのだ」

すでに息子の命を救ったあとだ。さらに1本の矢をわざわざ要求する意味がない。また、矢はテルのものではないような書き方である。これでは話が通じない。なにかの勘違いをしている。

テルを獄に移送する途中の湖水で突然の雷と豪雨が襲い舟の操縦がままならない。テルの縛めを解いて操らせた。テルは隙を見てひとり岸边に跳び登り足で舟を押しやる。こうしてテルはゲスラーから逃亡することができた。ここはシラー戯曲のままだ。

テルは古斯拿^{クスナフ}の山に身をひそめ待ち伏せして通過するゲスラーを射殺した(10頁)。

『警史』は、ここの描写を少し変更して加筆する。すなわち、テルはアルノルトの家にいき、事情を説明してアルノルトに助言を求める。

ゲスラーを射殺するのは同じだ。しかし、助言者としてアルノルトを出現させたのは、はたして有効かつ合理的であるのか。はなはだ疑問である。この場面ではテルが自分の判断によってひとりで行動するほうがよい。より力強く彼にふさわしいと思うからだ。

元氣第11回 - 警史第11回

山中を行くウィリアム・テルは、野猪に襲わ

れる。刀で刺し踏みにじる。

「野猪」は日本語原文のまま。日本語の猪は漢語ではブタだ。漢語の野猪と同じだからそのままでもよかった。そこを「野豕」と翻訳している。しかも、「刀を抜いて斬りつけた[抜刀斬之]」をくり返したことにした(71頁)。日本語の「惕爾は足に信じて踏みにじる」(12頁)は信じられなかったようだ。

漢訳では描写のところどころを簡潔化する。そこで出会った樵のテルについての感想だ。

樵夫も亦惕爾を踵^{きびす}より頭まで視上げ視下すにその状貌魁梧にして決然として立たる有様宛がら地より生たる如くなれば益す驚嘆しアテ恐るべき偉丈夫なりと思ひつゝ、.....13頁

樵夫亦熟視惕爾自頂至踵。若有驚嘆状良久。72頁

樵もまたテルを頭から踵まで熟視し長く驚嘆する様子であった。

漢訳は、底本の太筋は把握したまま細部を省略して字数を圧縮する。

テルは、このスイス独立派である樵に命を狙われる。敵のスパイではないかと疑われたからだ。

ところが、漢訳では「疑は山魁木魅等類[山の妖怪ではないかと疑った]」にした。スパイではなく妖怪にしてしまつては緊張感がゆるむ。

樵は堂々としたテルの容貌と態度に感嘆し「嗚呼斯る豪傑を吾が党に加へなば千万人に勝るべしと独言^かつゝ、.....」(15頁)と思う。この段階でテルはスイス独立運動の中心には位置していないことがわかる箇所だ。漢訳はここを省略する。その樵は盟約書を落としていった。

テルは山中に砦を見つけた。そこにはいわゆる3傑がいた。テルの義父ワルテル、壮士ウィルニー、アルノルトである(日18頁/漢74頁)。テルの命をねらった樵がそこに呼ばれて彼の名

前は波得満^{ペートルマン}である。盟約書は名簿でもあるらしくそれを出すようにいわれた。ペートルマンは名簿を失ったと白状する。ワルテルは我らの生命を敵に贈ったのと同じだといひ、ホウムガルテンに首を刎ねと命じる。待て、と止めるのは壮士ウイルニー（ここでは仁者。日21頁 / 漢76頁）である。押し問答の最中にテルが割っている。盟約書を取り出す。おお、それこそ失ったものだ。

第7回において3傑が捕縛されそうになったとき、どこからともなく矢が射こまれてき救われたことがあった。その顛末をテル自身が説明する。

某過^{サルネン}日撒爾年を距る七八里の山間に於て三人のもの奸吏に圍まれ奮激突戦なすを林中より覗ひて以為らく是れ吾が朋友か否らずんば或は吾々と志を同ふするものならんと思ひしかば林中より捕兵を乱射して彼等を逸せしめたり。34-25頁

又前行者於山間。距撒爾年七八里。忽遇三人。為賊吏所迫。奮力激戦。某思此必吾等全志。因見賊勢猖獗。乃隱從林間射之。賊即奔逸。77-78頁

また、以前にサルネンから7、8里離れた山間において3人のものが悪役人に迫られて激しく戦っているのに出くわした。私はこれは必ずやわれらの同志であると思つたし、悪人の勢いが激しいのを見てひそかに林間よりこれを射撃すると悪人は逃走した。

日本『元氣』に出てくる「某」は自分を指して使用している。漢訳も同じ。上に引用した部分の漢訳は、ほぼ逐語訳といつていい。

同志たちは、明年1月1日に総攻撃を開始することに決定している。自由万歳を一斉に唱える。その様子をうかがっている者がいた（26頁）。ただし、『警史』にはこの小さな箇所を

省略する（78頁）。

元氣第12回と第13回の一部 - 警史第12回
風景描写からはじまる。

落陽已に晩景を収めて遠山微雲なく玉兔
高く窓に飛んで樹影婆娑たり。27頁

「玉兔」は月を意味する。「樹影婆娑」は「樹の影がゆらゆらと揺れている」と辞書にはある。そのまま漢訳でも使うことのできる表現だ。

時斜陽將落。微風四起。窗外鳴禽婉轉。
樹影婆娑。79頁

時に夕陽は落ちようとしており微風がまわりにたち、窓の外では動物が低く高く鳴いて樹の影が揺れている。

漢訳の雰囲気は底本とよく似ている。だが、そのままというわけではない。日本語と漢語では共通する「玉兔」をわざわざ「窗外鳴禽婉轉」に書きかえる必要があったのか疑問だ。「婆娑」は「婆娑」の誤植だろう。

壮士ウイルニーは、自由の旗を翻して悪代官ランデンベルクの羅斯城（別の漢訳は羅思城）を襲うことを考えて興奮していた。底本にある次の部分は漢訳しなかった。「果して吾偉業成らば我は瑞西の三傑と称せられ自由の率先者と崇められ美名を万世に遺すべしと喜び極つて室中を走り廻りけるが……」（日27頁）

書き換えて次のようにした。「さて成功した後にはどのようにするか、内政の政策はどのようにするかを考える。また外交の方針を定めるなど思わずてんてこ舞いになるのだった〔且事成之後。如何如何。而布内治之政策。如何如何。而措外交之方針。更不覺手足踏舞〕」（漢79頁）

日本『元氣』で自己満足するよりも、『警

史』で頭脳を絞る方が壮士ウイルニーにふさわしい。

それにしても心配なのが捕らえられたレジック(エリナの父)のことだ。そこにエリナからの手紙1通を受け取った。父は死刑に決まったので、父の命を乞うために悪代官ランデンベルクの側室になるという。さらに、壮士ウイルニーを思うエリナの真情が告白してある(日28頁/漢80頁)。ただちにエリナを救うためひとりでサルネンをめざして出発した。

ここまでが日本『元氣』の第12回だ。『警史』は、それを無視して続く日本『元氣』第13回を取り込む。すなわち、壮士ウイルニーはサルネン城(別名ハウスブルク城)に進出し探索して獄舎らしきものに到達した(日31頁/漢82頁)。番兵に見つかり包囲される。知人を訪問しに来たといういいわけが通用するはずがない。そこに「吾が郷人久濶濶なりし吾が友人よ」と声をかけてきた者がいる。

元氣第13回の一部と第14回 - 警史第13回

呼びかけてきたのは留愁^{ルージュ}だ。壮士ウイルニーは、面識もない。危機を脱してルージュの住居へ案内された。ルージュの説明はこうだ。彼はワルトルの家僕だった。息子はハウムガルテン。第2回に突然出現してきたハウムガルテンの素性が明らかになった。ワルトルらは悪代官ゲスラーに対して義兵をあげるだろう。その時は内部から応じるために城塞に入り込んだと説明した(日38頁/漢85頁)。ふたりは事情を密書にしてワルトルに知らせる。ワルトルの指示は、壮士ウイルニーは城塞にあって攻撃があったときには内応するようということだ。

悪代官ランデンベルクの城塞には、独立派(本稿における仮の呼称。のちに本文で民権党と称される)のルージュ、壮士ウイルニーが身を偽って潜入している。いわばスパイだ。

元氣第15回 - 警史第14回

独立派の指導者のひとりワルトルの家にもスパイは入り込んでいた。少女リシーを誘拐し悪代官ゲスラーに献上しようとしていた山賊ゴルネイドだ。アルノルトにその目論見をうち砕かれた。山賊ゴルネイドは、^{ルージュ}羅撒の変名でワルトルの家僕となっている。ワルトルが謀反を計画していることを探り、金目当てで告訴するつもりだ。主人の留守をねらい夫人^{ローザン}璠黎を脅し財産を奪おうとした。夫人は機転をきかし山賊ゴルネイドをだまして部屋に閉じこめ夫ワルトルの会合先に走った。秘密会議を開催していたワルトル、テル、アルノルト、クラニーの4名は、ただちにワルトル家に駆けつける。山賊ゴルネイドはすでに部屋から脱出していた。計画が露顕したからには、取るべき方針はふたつにひとつだ。同志を召集してただちに城塞を襲う。もうひとつは山賊ゴルネイドを追跡する。アルノルトは先手必勝だといいい前者を主張した。ワルトルは少人数での蜂起は危険だと後者を主張し皆の合意を得た。4名は山賊ゴルネイドを追った。湖のほとりに追いつめられた山賊ゴルネイドは、湖水に逃れた。

ほとんどスパイ小説が冒険小説のような様相を呈している。山賊ゴルネイドがワルトルの夫人ローザンに横恋慕するなど、もともとシラー「ウィリアム・テル」とは関係がない。テルには特別にリング射的の見せ場はある。だが、本作品においては、なんともいうように主要人物のうちのひとりにすぎない。

漢訳は少しの加筆と省略があるが、ほぼ底本をふまえて忠実である。ただし、違和感をおぼえる箇所もある。いくつかを示す。

夫人ローザンを描写して日本『元氣』「花も羞ずべき年紀三十ばかりなる明眸皓齒の一佳人」(40-41頁)である。それを『警史』は「徐娘半老。風韻猶存[うばざくらで色気はまだある]」(87頁)だ。三十歳ばかりまでは漢訳しなかった。両者で女性の年齢についての捉え方が異なるからだろう。印象が少し違うように感

じる。

日本語で「野の末山の奥」(42頁)は普通の言いまわしだ。それを漢訳では固有名詞の野末山(88頁)と誤解している。

山賊ゴルネイドは、アルノルトに追いつめられた。ワルトル家から盗んだ財宝を背負っていた。それをどうしたか。

日本『元氣』「背負たる財物を卸すより早く亜爾那脱を目懸けて擲付」(53頁)というからアルノルトに向けて投げつけたのだ。『警史』「急棄所負財物而逃[急いで背負っていた財物を捨てて逃げた]」(93頁)では迫力が不足する。

元氣第16回と第17回 - 警史第15回

城塞につながれ死刑を宣告されたレジックが「民権党」であることが書かれている(日54頁/漢94頁)。党名が出てくる最初だ。娘のエリナは父の命を救うために悪代官ランデンベルクの側室になるために来城するという話だ。壮士ウイルニーは密告しようとして馳せてきた山賊ゴルネイドをつかまえた。ハウムガルテンとともに彼の知った秘密を白状させる。明日が襲撃蜂起だ。

エリナが来城するのを壮士ウイルニーは遠くからながめる。その間に山賊ゴルネイドは逃亡した。見逃したハウムガルテンは自分の失敗を恥じて自殺をはかるが壮士ウイルニーに止められる。この自殺云々という箇所は漢訳では省略する。

謀議が露頭してしまったのであれば、しかたがない。壮士ウイルニーら3名は獄舎につながれたレジックを救出するために突進した。

以上が日本『元氣』第16回だ。『警史』はそこで終了しない。日本『元氣』第17回をそのまま続けて漢訳している。

テルを首長として羅斯山を襲った。アルノルトは小笛を一声吹き鳴らせば城塞から縄が1本投げおろされた。あらかじめ約束していた少女

リシーの仕業である(日64頁/漢訳は省略)。

勢いのあるテルらは、城塞を制圧した(日64-65頁)。漢訳は戦いの模様はほぼ省略して結果のみを説明する(漢99頁)。だが、少女リシーの姿を見つけることができない。漢訳はここもとばしている(漢99頁)。

羅斯城を奪われたことを知らない悪代官ランデンベルクは、サルネン城で酒池肉林の宴会を開催していた。そばにエリナを侍らせている。山賊ゴルネイドが通報しに来たのを明日にしると追い返す(日68頁)。漢訳は、悪代官ランデンベルクが山賊ゴルネイドを面罵することに変更した(漢100頁)。

城塞の内外から兵を挙げ、テルらは勝利した。悪代官ランデンベルクは捕まり命だけは助けられてドイツに放逐された。

壮士ウイルニーは、エリナと再会する(日72頁/漢103頁)。

日本『元氣』は、陥落させた2城塞以外の城についての攻略方法を詳細に説明する。『警史』は、スイスの民権党が大勢を制しドイツ官吏を本国に送還したことを述べるのみ(漢104頁)。大幅に簡略化した。

元氣第18、19、20回 - 警史第16回

少女リシーとアルノルトが3度目の出会いはたす。リシーは梨姿と以前は表記していた。日本『元氣』後編81頁では李姿になっている。また、『警史』106頁は利姿だ。すべて同音だが漢字が異なる理由を知らない。

リシーの身の上話は驚くべきものだった。母とともに親戚のところから帰宅途中に襲われて誘拐された。犯人はいうまでもなく山賊ゴルネイドだ。詳しい経過を話し、さらに父はルージー、兄はハウムガルテンだという。意外な人間関係が明らかにされる。漢訳では、結論部分の父ルージー、兄ハウムガルテンのみを示す(漢107頁)。さらに、少女リシーを助けた老婆の子細などを含む説明描写はすべて省きページを進

める。漢訳はそのため歴史的背景をいささか欠く結果になった。

アルブレヒト1世は甥ヨーハンに殺害される。1308年のことだ。それを伝えにきたのがホウムガルテンだった。

日本『元氣』93頁「帝はその姪戎王の為に弑せられ給ひしとの風説あり」はそのまま『警史』107頁に「日耳曼帝為侄戎王所弑」とある。そのためウィリアム・テルが戦っていた敵軍は退却をはじめた。テルは敵軍を追撃し食糧器械(注:武器)を奪い取った(日99頁/漢108頁)。

リシーは行方不明になっていたがワルトルが救った。アルノルトはふたたび会うことがなかった。駆けつけた父ルージー、兄ホウムガルテンとも長い別離をへてようやく顔を会わせた。さらには、リシーを助けた老婆は山賊ゴルネイドと昔は夫婦だった(日104-105頁/漢109頁)というのだから驚く。登場人物のすべては、それぞれつながっていたのだった。

日本『元氣』第20回は、本文約9頁だ。アルブレヒト1世が殺害されたあとの政治的動向がまず説明される。

複数の人名が出てくる。現在の表記と日本『元氣』108頁および『警史』110頁に出てくる表記を対照する。

ハプスブルク家オーストリア公

フリードリヒ3世

フレデリック
弗勤力

亜利侯弗勤力(注:勤は勒の誤植)

弟 レオポルト1世

リベルト
里伯徳

里伯徳

ヴィッテルスバッハ家バイエルン公

ルートヴィヒ4世

ルノーブル
巴威暑の路易

巴威暑路易

現在の表記からすると日本『元氣』は少し異

なる。漢訳は底本のまま。

弟レオポルト1世は、悪代官ランデンベルクを先導として1万5千の兵を率いて進軍した。迎える3州の兵はあわせてその数1千3百にすぎない。総軍の将はウィリアム・テルだ。摩留モル牙典ガルテンこそ要害の地である。ここを決戦場と定めた(日111頁/漢111頁)。

『警史』は底本の約9頁を約2頁強に圧縮したから戦闘の詳細は省いて結果だけを記すことになるものしかたがない。

漢訳が省略した1例をあげる。弟レオポルト1世は逃亡し自殺をしようとしたが、山賊ゴルネイドが救った(日113頁)などである。

1315年11月15日モルガルテンの戦いでスイス3州の兵は大勝した。「三州は永久聯合の盟約を為し」(日114頁)は、漢訳では「三州聯盟益鞏固。立共和之政体[3州の聯盟はますます強固なり共和の政体を立てた]」(漢111頁)となる。

ホウムガルテンの妹リシーとアルノルトの結婚を媒酌するのはウィリアム・テルだ。レジンクの娘エリナと壮士ウイルニーの結婚を取り持つのはワルトルだ。こうして2組の恋愛が成就した。

「ロセルヤネ揚爾及三傑を名けて安眠者といひ路塞尼爾湖の近傍に安眠し」(115頁)た。漢訳はここを省略する。

日本『元氣』の細かな描写を削る『警史』は、その分だけ、特に最終部分は筋を追うだけの傾向が強くなった。歴史的記述を省いただけ冒険恋愛小説の要素が強調されたということもできる。

漢訳で追加されたのがもうひとつの「結尾」だ。

結 尾

その内容のおおよそを述べる。

韻蘭嬢はスイス人であることが明らかにされる。そのスイスは、長く他民族に束縛され压制

のもとで志気を挫かれその知識を閉ざされてきた。ここの「志気」は底本でいう「元氣」と同じ意味だ。そこから自由独立の権利を享受できる状況にまでなった。彼女は、貴国、すなわち中国の最も有名な倫理学家孟子のことはだといつて次のようにいう。

「私はその民の先覚者ではないのか。道理を先に知り後の者が知る。道理を先に理解し後の者が理解する[我非斯民之先覚者歟。先知覚後知、先覚覚後覚]」

上は記憶によったためか原文を少し書きかえている。伊尹のことはを紹介して以下のとおり。「道理を先に知った者に後の者に知らせるようにし、道理を先に理解した者に後の者に理解させるようにする。私は天が生んだ民のなかで先に理解した者(先覚者)である[使先知覚後知、使先覚覚後覚也、予天民之先覚者也]」(孟子・巻第9 万章章句上)

先人から後人へ啓発のための教育を受け継いでいく。本書『警史』は、小国であろうとも自ら努力して独立することができる模範例としてあげている。

4 結 論

それにしても『警史』は、不思議で奇妙な物語枠を設定したものだと思う。スイス人の若い女性が中国人留学生にドイツ語を教授している。その女性がドイツ語で書かれた書物によってスイス歴史の概略を講釈する。使用言語はドイツ語らしい。その場所はスイスかとも思うが定かではない。スイス人の彼女が中国人留学生にむかってわざわざ孟子から引用して説教する。

この楔子と結尾のもたらす強い違和感はどうだろう。

中国人留学生が美しいスイス人女性に教わっている。といいながら、該書のふたつの序はどちらも日本東京で書かれている。原作は日本語だ。刊行は東京神田区駿河台鈴木町十八番地にある訳書

彙編社だし印刷は東京並木活版所である。

どう考えてもスイス人の美女を登場させた理由が不明だ。

そういう調和のとれない説明が違和感を抱かせる。楔子と結尾をつけ加える必要はなかった。どうしてもというのであれば、ここは場所を日本にすればまだよかった。ドイツ語を教える日本人の教授が日本語を使って中国人学生にウィリアム・テル物語を紹介する。そうすればすんなりと前後のつじつまがあうように思う。

そうしなかったのは、漢訳の内容がスイス独立史だから前後も外国風にしたかった。あるいは、底本が日本の小説であることを隠蔽したかった。また、いかにもドイツ語原作を漢訳した、という印象をあたえたかったのか。それにしても、栄驥生序および盛時培序は日本に居ることを強調していつじつまがあわない。

漢訳者の陸龍朔(一説に翔)をはじめとして序を書いたふたりともに、該漢訳本が教育的なスイス史だと強調する。そのためか底本とした『国民之元氣』という書名をそのまま漢訳しなかった。漢訳して新しく『瑞西独立警史』とつけたから肩肘張った四角な印象を読者にあたえる。書名と内容が釣り合わない。もとの日本語小説は、冒険恋愛小説ということがある。作品自体はまとまった小説だ。陸龍朔(一説に翔)は該作の教育的側面をそれほど強いわなくてもよかったのに、と思ってしまう。訳書彙編社としては、歴史を重視する刊行路線に組み入れるための書名変更だったかもしれない。関係者の証言がないから推測にとどまる。

題名は『瑞西独立警史』といい政治歴史小説に見えながら、中身は立派な冒険恋愛小説、すなわち大衆小説だ。

漢訳にはいくつかの小さな勘違い、加筆また比較的大きな省略はある。だが、まったくの別物には書き換えてはいない。ほぼ原文に忠実な翻訳になっている。漢訳の水準は良だと判断する。 罫

文明戯「ハムレット」について 「鬼詔」と「竊国賊」

樽本照雄

脚本など

文明戯「ハムレット」の脚本は残っていない。もとから文明戯(中国の早期話劇)には脚本はなかった。「幕表」があるだけ*1。一方で、意外と脚本は残っているという指摘はなされている*2。だがそれにも「ハムレット」は含まれていない。

「幕表」とは、ものの本によれば新劇の登場人物表、登場の順序、主要な台詞などを記録したものである。「表」というくらいだから一覧表か。普通、保存される性質のものではなさそうだ。

演劇の最終目的は上演することだ。その途中過程の脚本には重きがおかれないのも無理はなからう。新劇の筋を考えて演出する実作者にとって「幕表」は必要かもしれない。だが、脚本を書いて台詞を明記したところでそれを当時の役者が読みこなせたかどうかは別の問題だ。演出家が役者にあわせて口立てで台詞を変えていく。役者がかわれば台詞も変化し続ける。作る側から言えば、脚本がなくても困らないし残らなくても不便ではない。

このように常識的なことを述べるには理由がある。シェイクスピア作品を文明戯に仕立てるには、なにを手がかりにするだろうか。手元

に拠るものもなく、ただ「ハムレット」という題名だけをたよりに新劇の粗筋を空想し組み立て台詞を創作できるだろうか。そういう素朴な疑問が出てくるからだ。(以下、シェイクスピアを沙翁、シェイクスピア戯劇の意味で莎劇などを使うこともある)

中国におけるシェイクスピア受容史について、それに近いありそうもないことを研究者が平気で記述している。清末の知識人は、シェイクスピアの名前だけを知ってシェイクスピアを絶賛したと説明する。これほど当時の知識人をばかにした文章はない。そう書いている研究者がその矛盾に気づいていないのも不可解なことのひとつだ。清末の知識人が沙翁を賛美するには、それなりの根拠があるはずだ、とは思われない。先行論文を読んで最初から否定的な視線しか持たないのが原因だ。

研究者自身が同様のことを行なっているからそれを投影しているのだろうかと思ってしまう。沙翁と莎劇に関連して「林紘批判」という名称だけを見て中身を吟味せず自分も追隨して林紘批判を実行しているという意味だ。

徐半梅の文明戯「ハムレット」

徐半梅が『話劇創始期回憶録』(1957)*3で次のように回想している。

民鳴社が活動を停止したあと徐半梅は数人と上海広西路の笑舞台に劇団を組織した(87頁)。

有一回春雨連綿一星期多，我們正上演莎士比亞的《哈姆莱特》，廣告上的題目，我們用了兩句民間俗語，叫“天要落雨，娘要嫁人。”哈姆莱特王子的這一出悲劇，便是為了他母親嫁人。88頁

ある時、春の雨が1週間余りも続いたことがあった。私たちはちょうどシェイクスピアの「ハムレット」を上演していたから広告の題目に民間の俗語を使い「雨降りて、母ちゃんは嫁に」とやった。ハムレット王

子のこの悲劇は、彼の母親が嫁いだためであった。

徐半梅は、笑舞台の新聞広告について書いている。毎日のように出稿した新聞広告の文面はそのつどかえられたから上はそのひとつだ。

調べれば、1971年に林彪が毛沢東暗殺計画に失敗し空路モンゴル方向に逃亡したとき、毛沢東が「行かせる」といって「天要下雨，娘要嫁人」を口にしたという。そう伝えられているというだけ。事実かどうかは知らない。

寡婦である母親が再婚するという。息子はそうさせたくない。母親が息子に衣服を洗うようにいう。洗って乾けば再婚はとりやめよう。ところが長雨がつづいて衣服はとうとう乾くことがなかった。「雨降りて、母ちゃんは嫁に」というわけ。

春の長雨にハムレットの母親が再婚することを重ねた。うまい宣伝文句のように見える。中国の俗語としては、運命に対しては人力で制御しようがないという意味だ。長雨と再婚部分が重なり、ハムレットが父の仇を討って最後は全員が死ぬのが定められた運命ということならば一致する。

徐半梅は袁世凱の名前を出して3月のことだという。すると1916年に該当するだろう。予測するまでもない。袁世凱が皇帝になろうとしたとき舞台人は戯劇で大いに袁世凱を罵った、と徐半梅は説明している(85頁)。ただし、彼は「シェイクスピアの「ハムレット」[莎士比亞の《哈姆莱特》]」と書いているだけにとどまる。上演した時の題名が「鬼詔」なのかあるいは「竊国賊」なのかについては言及していない(後述)。また、袁世凱批判を込めて上演したとも明記はしない。前後の文脈からそう読めるということはいえる。

文明戯「ハムレット」の背景にあるというのはこうだ。袁世凱は1915年に共和制を廃止し帝制を復活させた。1916年1月より帝位につき、

年号を洪憲とし国号を中華帝国に改めた。

ウェブを見ると2篇の文章が目についた。袁世凱を批判するために莎劇「マクベス」を改編して「竊国賊」にしたという説明がなされている。そう書くふたつの文章はともに同じ新聞広告を引用掲載している。文章は2016年4月の発表だ。シェイクスピア没後400年を記念したものと思う。

徐半梅のいう「ハムレット」がなぜ「マクベス」になるのか。

文章2篇の該当部分を紹介する。

新聞広告「竊国賊」

著者と題名は以下のとおり。

羅昕「晚清民国时期的莎士比亚中文版都長啥樣？」ウェブサイト『澎湃新聞』2016.4.20 電字版

漢訳シェイクスピアの歴史を紹介している。文明戯「竊国賊」についての説明を示す。

「1915年12月25日、袁世凱は翌年より「洪憲」と改元することを宣告すると大衆の反対を激発させた。そのような背景のもとでシェイクスピアの経典「マクベス」は翌年「竊国賊」に改編された。この莎劇は一時センセーションを巻き起こしたといえることができる」*4

もとにしたのは莎劇の「マクベス」だと明記している。

次の文章も似たようなものだ。

施晨露「莎士比亚在中国，這些故事你應該知道」ウェブサイト「上觀」2016.4.23 電字版

同じように文明戯「竊国賊」を説明して次のとおり。

「1916年、袁世凱が返り咲いて皇帝と称したことに対して新社会は「マクベス」を改編した文明戯「竊国賊」を上演し、申報に大きな広告を出した」*5

沙翁の「マクベス」をもとに改編して「竊国賊」にしたと説明している。ただし、施晨露は新社会の興行だと述べて徐半梅の笑舞台とは異

なる。当事者の証言と食い違うのが奇妙だ。

さて、羅施のふたりとも莎劇だといいいながら、よった版本が何であるかは説明しない。英語から直接漢訳したのか、その過程にはまったく言及しない。あまりにも明白で常識的な事実だから説明する必要はないという判断だろうか。それにしても両者ともほぼ同様な記述であるのは不可解に感じる。

2篇の文章がともに掲載している新聞広告を引用する。



1916年《申報》上の《竊国賊》広告(ネットより引用)

劇場名あるいは劇団名が見えない。広告の一部分を切り取った印象を受ける。本来は表示してあったのを引用するにあたって上部を切除したのかどうかは不明(後述)。上から順に見ると「編演(鄭正秋)主任」とある。脚本創作と演出を鄭正秋が担当したという意味だ。

次は出演役者の名前が並ぶ。資料だから以下に示す。

周楽天、吳湘濤、徐青樵、沈冰血、徐半梅、韓達心、李悲世、汪優游、鄒劍魂、張嘯天、徐寒梅、羅笑倩、張利声、王羞華、邵迺琨。

5番目に徐半梅の名前が出ている。役者として舞台に立っていたとわかる。徐半梅の回憶録とこの新聞広告から見て笑舞台のものと考えてよい。

上演日時と演目を示して「三月二十六夜准演正秋新編名劇/竊国賊」だ。鄭正秋の名前を2度も出して宣伝になるくらい有名人であったことがわかる。題名に添えられた絵図は中国の皇

帝がかぶる礼帽で「冕」という。前後に簾(旒)がつく。斜めに立てかけられたのは「笏」だろう。「竊国賊」の上演時に使用されたというよりも、ただの挿し絵かもしれない。黄愛華は『時報』の上演広告を見て「時裝新劇」、つまり現代劇だと書いているからだ*6。

劇の内容を説明しているから冒頭だけを見よう。

「身は臣下でありながら君主を盗み国を盗み君主の后と私通する。身は弟でありながら嫂を盗み政権を盗み人の子に盗賊を父と認めさせる」*7

その内容は、どう見ても「ハムレット」だ。「竊国賊」という題名で上演されたのは間違いない。羅昕と施晨露がどうして「マクベス」だというのかわけがわからない。ふたりともに勘違いするというのも奇妙な話だ。

文明戯「ハムレット」の成立と上演

文明戯の沙翁ものは、林紘+魏易訳『英国詩人吟辺燕語』(1904)にもとづいて改編した。そう解説した文章をよく見かける。これが一般常識なのだろう。

注に示した鄭正秋『新劇考証百出』の「莎士比亞著「^{ママ}颯媒」」に趙驥が注釈をつけて次のように説明する。

「この劇(注:颯媒)は林紘、魏易合訳の『吟辺燕語』からできている。『吟辺燕語』は1904年に商務印書館より出版された。表紙には「原著者英国莎士比亞、^{ママ}翻譯者閩隸林紘、仁和魏易」と表記してある。実のところ該書はラム姉弟の『シェイクスピア物語[莎士比亞戲劇故事集]』を訳したものである」208頁

『吟辺燕語』に収録されているのは「颯引 THE TEMPEST」だ。それを文明戯にして「颯媒」に改題したのかどうかは不明。また、林訳ではシェイクスピアを莎士比と表記するのが正確だ。一般に莎士比亞というのとは異なるから注意されたい。

『吟邊燕語』に収録された「ハムレット」は題名を「鬼詔」という。父親の亡霊(鬼)が出現して弟に殺されたことを告げる(詔)ところからの命名だ。

趙驥は文明戯「鬼詔」について、そのもとになったのが『吟邊燕語』の「鬼詔」だと注をつけるべきだった(190頁)。単に沙翁の原作が*The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark* だというのでは不十分である。この注釈だと莎劇から直接漢訳して脚本を作ったようにしか読めないからだ。また、上演記録に言及しないのものも足りない。

鄭正秋『新劇考証百出』において「莎士比亞名著「鬼詔」」の粗筋が紹介されている(190-191頁。190頁は「莎士比亞著」と記す/影印353-351頁)。だが、鄭正秋はそれが『吟邊燕語』の「鬼詔」にもとづくものだと「竊国賊」に改題されたなどとは解説しない。どこでいつ上演したのかも書かない。周辺の事情説明ではなく文明戯「鬼詔」の内容を記録するのが主目的だからだろう。

それにしても鄭正秋が表題にしている「鬼詔」がまぎらわしい。『新劇考証百出』に「鬼詔」とあるから上演時もそのままの劇名だと普通は受けとめる。しかし、文明戯の題名として実際に使用されたのかどうかはわからない。

混乱させるのは董健主編『中国現代戯劇総目提要』(2003)*⁸でもある。1918年の項目に「劇名:鬼詔」を配置している。どう見ても「鬼詔」が題名だ。「訳編者待考」として鄭正秋を忘れている。粗筋は鄭正秋『新劇考証百出』からそっくり引用した。「竊国賊」だという説明もない。また、なぜ1918年の上演にしたのか根拠は示されていない。1918年に「鬼詔」という劇名で上演したのかもしれないが、そこは不詳とするしかない。

「鬼詔」は鄭正秋の書き間違い、あるいは記憶違いの可能性はある。少なくとも、1916年の段階で『申報』の新聞広告には「竊国賊」とな

っているのが事実だ。

上に見る『申報』の広告について、羅昕、施晨露ともにその掲載年月日を明記していない。見れば上演が「三月二十六夜」と書かれている。「(1916年)三月二十六日」とかと推測はする。今の段階で確定できないのでカッコを使った(後述)。

これとは別に1916年5月7日の新聞広告が紹介されている。瀬戸博士『中国のシェイクスピア』(2016)*⁹より引用する。

文明戯では他のシェイクスピア作品と同様に『吟邊燕語』の『鬼詔』を脚色した作品が何回か上演されている。ただし、文明戯最盛期の春柳社、新新社、民鳴社ではなく、もう少しあとの上演であった。その最初は、申報で確認できる限りでは一九一六年五月七日に笑舞台で上演された『竊国賊』である^[2]。「竊国賊」とは、国を盗む賊、悪人という意味である。広告文には「莎翁戯をみて竊国賊をみなかつたら非常に惜しい。ただ鬼詔は吟邊燕語^マみえるが、最も有名で、最も脚色が難しく、最も演じにくく、配役が最も難しい。思いがけず、正秋先生の脚色は非常に良く、名を竊国賊と改めた。脇役もまたよい。優游の王の弟、劍魂の後、悲世の女である」とある。これをみると、鄭正秋が脚色し、自らハムレットを演じたいらしい。191頁

瀬戸博士の説明によると、文明戯「ハムレット」は、最初から「竊国賊」という劇名で上演された。1916年5月7日のことだ。最初というのだからこれが初演になる。ここは瀬戸博士の新発見である。2005年の『中国話劇成立史研究』111頁では1916年9月3日に上演したと書いているが、さりげなく訂正したのだろう。

脇役者の名前を出して「優游の王の弟、劍魂の後、悲世の女」という。前出「三月二十六夜」

の新聞広告に見える汪優游、郁剣魂、李悲世らがあてはまる。

読者はお気づきであろう。瀬戸博士の記述には前出の新聞広告と一致しない箇所がある。写真を見る限り「三月二十六夜」の広告がすでに存在する。『申報』の舞台広告は1916年5月7日が最初ではないことになる。瀬戸博士は同じページで「この上演は好評だったようで、同年八月六日、九月二十九日にも上演されたことが、申報上演広告からわかる」と書く。文脈からいって瀬戸博士が発見した5月7日は初演だと断定していることがわかる。だが、明らかに「三月二十六夜」の新聞広告と齟齬をきたしている。

上の広告文で『吟辺燕語』と「鬼詔」の名称を出しているのは興味深い。そのうえ「最も脚色が難しく」とも述べている。つまり、鄭正秋は莎劇そのものから漢訳して脚本を作ったわけではないと明記しているのだ。莎劇にもとづきラム姉弟が小説化した『シェイクスピア物語』がある。それを林紓と魏易が漢訳して『吟辺燕語』にした。瀬戸博士が説明するとおり、鄭正秋はそのなかの「ハムレット[鬼詔]」にもとづき脚色して文明戯に仕立てた。莎劇とはいいいながら、ラムの小説である林訳の粗筋だけを主として利用した。つまり、台詞についていうと原作の莎劇と文明戯「竊国賊」は基本的には別物である。鄭正秋による創作劇だといっているところが広告では「莎翁戯」つまりシェイクスピア戯劇そのものと宣伝している。鄭正秋も自著に「莎士比亜名著」と記して沙翁を前面に押し出した。

これこそ瀬戸博士のいう「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」(96頁)ことにほかならない。瀬戸博士はそれを根拠にして林訳を批判した。だが、この文明戯「ハムレット」について瀬戸博士は批判しない。評価の二重基準を適用して平気である。

調べてみると瀬戸博士の上記引用と説明は奇

妙で不可解で、はっきりいえば虚偽を混ぜ込んでいることが判明する。

一步深める

そこにある文献を使用したにすぎないからいくつかの箇所が疑問のままに残った。

『申報』に見える「三月二十六夜」と記した広告の正確な掲載年月日が不明確だ。

文章に添えられた写真は修正されているのではない。劇場名、あるいは劇団名を表示する部分が削除されていると思われる。普通はどこで上演するか明記するだろう。それがなければ新聞広告を出す意味がない。

瀬戸博士は「その最初は、申報で確認できる限りでは一九一六年五月七日に笑舞台で上演された『竊国賊』である」と断言した。しかし、「三月二十六夜」の広告はそれよりも時間的に先行するように見える。どちらが正しいのか。

以上の疑問は、新聞の実物で確認しなければ解決できない。

ということで『申報』影印版で確かめた。

「竊国賊」の広告についていうと1916年4月27日(陰曆三月廿五日)、同年4月28日(陰曆三月廿六日)の2種類があった。瀬戸博士が発見した5月7日より前に掲載されている。2種類ともに示す。





1916年4月28日



1916年5月7日

広告にある「三月二十六夜」は陰暦だった。中華民国元年から新暦を採用したが、民国5年になっても演劇界あるいは一般社会の日常生活では旧暦を使用していたことがわかる。陰暦三月廿六日(新暦4月28日)に上演するから前日の廿五日と当日の廿六日に広告を打った。これを見る限り「竊国賊」の初演は瀬戸博士のいう1916年5月7日ではなく、それより前の同年4月28日である可能性が高い*10。

劇場名の箇所が切断されていることも確認した。掲載した写真を見てもらえれば「笑舞台」であることがわかる。

念のために瀬戸博士が発見した5月7日の広告も見た。奇妙なことに、瀬戸博士が翻訳して引用した広告文は全文ではなかった。全体のほぼ半分にすぎない。しかも前部にかたよっている。

瀬戸博士の嘘

冒頭に大きく「看戲不看竊国賊太可惜」、次に小さく「看西装戲不看竊国賊更可惜」とあるが、瀬戸博士はそれらを省略した。

また、引用最後部分の「優游之王の弟」と訳した箇所の上には「故」1字があり、下の文章に続いている。続く後半を翻訳引用しなかったから「故」とつながらなくなった。瀬戸博士は

前後を取り繕うためにこの1字を無視した。

そこを含めて全文を引用する。瀬戸博士によって省略された箇所は黄色で示す。活字の大きさは均一にした。実際の模様は写真を見てほしい。

看戲不看竊国賊太可惜

看西装戲不看竊国賊更可惜

看莎翁戲不看竊国賊更大大可惜

莎翁戲 惟鬼詔(見吟辺燕語)最有名 而最難編 最難演 脚色最難配得當 万不料正秋先生編得非常之好 改名竊国賊 而配角又宜 故優游之王弟 劍魂之后 悲世之女郎 均經人嘖嘖稱贊 而正秋之太子 更能以至誠熱之至情至理動人 自有新戲以來 從未有過如此有價值 如此演得好 受歡迎之好戲也

瀬戸博士は広告文の前半を訳し「これを見ると、鄭正秋が脚色し、自らハムレットを演じたい」と説明して自分で推測するような書き方をした。しかし、瀬戸博士が省略した広告文後半には「正秋之太子」つまり鄭正秋のハムレットであると明記している。瀬戸博士の書き方では正確な説明になっていない。

脇役について瀬戸博士は「脇役もまたよい」

と訳して現在形である。初演の広告だと考えているからそう翻訳したのだろう。だが、実はこの部分は過去形なのだ。

「(脇役もよかった)だから優游の王の弟、劍魂の後、悲世の娘はすべて人々からしきりに褒めそやされたのだった[故優游之王弟 劍魂之后 悲世之女郎 均経人嘖嘖称赞]」

まだ幕上がっていないのに「人々からしきりに褒めそやされた」と書くのは奇妙だ。だからこそ瀬戸博士は原文の「故」1字とうしろの関連する部分を削除したとわかる。もとの過去形を現在形へ意図的に変更するという小細工である。

瀬戸博士が弄した小細工を漢訳者の陳凌虹*¹¹はどう処理したか見てみよう。

陳凌虹は、瀬戸博士の日本語をそのままには漢訳していない。『申報』の新聞広告から直接引用している。だから瀬戸博士がわざと削除した「故」1字も陳凌虹はゆるがせにせずそのまま引用する(180頁)。その処置は正しい。だが、瀬戸博士の正しくない引用に縛られ後ろに続く「均経人嘖嘖称赞」を示してはいない。陳凌虹はこの部分がないと前後の文脈が通らないことを理解していただろう。しかし、瀬戸博士の歪んだ引用を正すことはできなかった。というよりも、もし訂正していたら瀬戸博士の立論はその瞬間に崩壊するから、それはできない。ということは、陳凌虹もまた共犯者である。

ハムレットを演じた鄭正秋を、全体をまとめて人々を感動させたとほめあげて広告文最後の部分に続く。次がさらに重要だ。注目されたい。

「新劇が始まって以来、これほど価値があり、これほどうまく演じられ、人気を博したすばらしい芝居はいままでであったことがない[自有新戯以来 従未有過如此有價值 如此演得好 受歡迎之好戯也]」

「いままでであったことがない[従未有過]」とまで書いている。辞書的にいえば、空前の、前代未聞の、かつてない、などという意味だ。

単なる宣伝文句で軽い表現だということはできない。なぜこの重要な部分を瀬戸博士は無視するのか。

全文を読めば1916年5月7日(旧暦四月初六日)の夜に最初の上演を行なうという予告の宣伝であろうはずがない。すでに上演されていることが明らかにされているからだ。予告だと考えると強い違和感が生じる。時間が前後して辻褃があわない。

くり返すが、5月7日が初演であれば、舞台が開く前から観客に大歓迎されたことになる。文章として成立しない。それとも、当時の新聞広告だからでたらの内容でも宣伝になればいいのだ、というか。ありえない。

広告に見える「いままでであったことがない[従未有過]」という語句は、「竊国賊」がすでに上演されたことがあるから使用された。そう考えるのが自然だ。初演は1916年5月7日ではない。それ以前だ。証拠となる資料がある。前出1916年4月28日(陰暦三月二十六日)の新聞広告だ。

瀬戸博士は自分が発見したいいわゆる「初演」の新聞広告についてその後半部をなぜ紹介しなかったのか。

新聞広告は、文明戯「ハムレット」が観客から絶賛された事実を明記し大いに宣伝しているのだ。引用紹介する価値があると私は考える。

広告の価値ある後半部を特別に意図して無視したことは、普通に見れば奇妙な措置だと感じられる。だが、そこには瀬戸博士の隠した深慮遠謀がある。

瀬戸博士は文明戯「ハムレット」が上演された「その最初は、申報で確認できる限りでは一九一六年五月七日」だと断言した。1916年5月7日が初演であれば、新聞広告に書かれているすでに上演された時の情況説明と矛盾する。かといって5月7日以前の『申報』に「竊国賊」の上演広告を見つけることはできなかった(調査不足である)。5月7日が初演だとどうして

も主張するために重要部分をわざと省略するという荒唐技術を使用したのだとわかる。直視したくない事実を切り捨てた。瀬戸博士は自分の発見を正当化するためにそれと矛盾する不都合な部分を無視したのだ。

すでにある結論にあわせて文献を意図的に読み、原文の論旨を強引にねじ曲げる。瀬戸博士がラム姉弟『シェイクスピア物語』の漢訳2種類を批判したとき披露したやり口にはほかならない。否定的な結論を用意したうえで序文を解釈しようとする。正しく記述している原文を誤りだと決めつけた。瀬戸博士の誤読である。訳者が戯曲と小説を厳密に区別しているにもかかわらず、瀬戸博士は自分の考える結論にあわせるためにわざと曖昧に翻訳した。印象操作である。

瀬戸博士は自分が専門とする文明戯研究でもそのやり口を実行していた。それを見て私は意表の外だとは思わない。

これほどの荒唐技術を駆使する能力を有するのは瀬戸博士を置いてほかにはいないと断言できる。なるほど、「林紘を詐欺師に認定し林紘の名誉を毀損する瀬戸博士」だけのことはある。

罫

【注】

- 1) (趙驥)「附録1：鄭正秋、《新劇考証百出》与上海早期新劇」鄭正秋編、趙驥校勘『新劇考証百出』上海・中華圖書集成公司1919.4.10 / 北京・学苑出版社2016.1影印本。239頁
- 2) 飯塚朗「資料1 現存する「文明戯」脚本目録」『中国の「新劇」と日本 「文明戯」の研究』中央大学出版社2014.8.1 中央大学学術図書85。
- 3) 徐半梅『話劇創始期回憶録』北京・中国戯劇出版社1957.7
- 4) 原文は次のとおり。1915年12月25日、袁世凱宣布第二年改元“洪憲”，這激起了民衆們的反对。在此背景下，莎士比亞經典《麦克白》於次年被改編成《竊国賊》。這部莎劇可謂轟動一時。
- 5) 原文は次のとおり。1916年，針對袁世凱復辟称帝，新民社上演了《麦克白》改編的文明戯《竊国賊》，

并在申報上登出大幅廣告。

- 6) 黄愛華「上海笑舞台の変遷及演劇活動考論」袁国興主編『清末民初新潮演劇研究』広州・広東人民出版社2011.1、302頁。『時報』1616.5.18-31笑舞台演出廣告。
- 7) 全文は以下のとおり。為人臣而竊君竊国 私通君后 為人弟而盜嫂盜政權 強人子認賊作父 此其人為何如人 此其事為何如事 此其時為何如時 此其勢為何如勢 認賊作父 戴賊為君 此其恥為何如恥 父仇不共戴天 而母且夫事乎殺父之仇 不得已裝瘋做戲 以動娘心 到頭来大家難逃一死 此其慘為何如慘 以其人其事其時其勢其恥其慘 一一演之于舞台之上 則其戲為何如戲 明眼人于此 其亦来洒一掬傷心淚乎
- 8) 董健主編『中国現代戯劇総目提要』南京大学出版社2003.12。133頁
- 9) 瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房2016.2.29。(日)瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国：中国人的莎士比亞接受史』広州・広東人民出版社2017.1。180頁
- 10) 1916年3月11日付『民国日報』に廣告があるという(張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』(上海社会科学院出版社2012.8。192-193頁)。ただし、上演日時が明記してあるかどうかは不明。また、張治よりも前の2009年1月8日付ウェブサイト「豆瓣讀書」の feimo「林紘与“娛樂化”的莎士比亞」に同じ指摘がある。『民国日報』は未確認のため記録するにとどめる。
- 11) 陳凌虹は日本語著作『日中演劇交流の諸相 中国近代演劇の成立』思文閣出版社2014.8.20を刊行している。

清末小説から

野間信幸氏より資料をいただきました。感謝します

- 周 兆祥 『漢訳《哈姆雷特》研究』香港・中文大学出版社1981 香港中文大学中国文化研究所比較文学与翻譯中心専刊1
- 朱 静 清末民初外国文学翻譯的女訳者研究 北京大学『国外文学』2007年第3期(総107期) 2007.8.25
- 蔡 登山 林紘的「口訳者」之一：魏易 另眼看作家之十七 『全国新書資訊月刊』2008年11月

- 号 電字版
- 陳 祖恩 『上海の日本文化地図』上海錦繡文章出版社、上海故事會文化傳媒有限公司2010.4 / 2012.5第二次印刷
- 王 治江 莎士比亞戲劇在中国的本土化訳介概略 『燕山大学学报(哲学社会科学版)』第14卷第4期 2013.12 電字版
- 葉 曙明 『重返五四現場 一九一九・一個國家的青春記錄』中華書局(香港)有限公司2014.4
- 吳 倩 20世紀初頭における商務印書館の教科書と日本 『國際基督教大學學報 3-A アジア文化研究別冊』20(2014) 2015.3.31 電字版
- 左 鵬軍 陳翎伝奇創作考述 傅謹、袁國興主編『新潮演劇与新劇の発生』北京・学苑出版社 2015.5
- 近代文学の自覚和奠基 阿英の近代文学研究及其学術史意義 『近代戯曲与文学論衡』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2017.4
- 劉 瑞 日本訳莎活動影響下の《哈孟雷特》翻訳 從田漢訳莎の日文転訳之爭談起 『東方翻譯』2016年第2期(總第40期) 刊年不記
- 羅 昕 晚清民国時期的莎士比亚中文版都長啥樣? ウェブサイト『澎湃新聞』2016.4.20 電字版
- 施 晨露 莎士比亞在中国,這些故事你應該知道 ウェブサイト「上觀」2016.4.23 電字版
- 岳 凱華 『外籍漢訳与中国現代文学の発生』長沙・湖南師範大學出版社2016.8 文苑百花論叢
- 于 麗萍 『中日翻譯文化交流史』瀋陽・遼寧大學出版社有限責任公司2016.11 中外翻譯文化交流史叢書
- CÉSAR GUARDE-PAZ *MODERN CHINESE LITERATURE, LIN SHU AND THE REFORMIST MOVEMENT Between Classical and Vernacular Language*, SINGAPORE: PALGRAVE MACMILLAN, 2017
- 劉 小剛 『清末民初翻譯文学中的西方形象』杭州・浙江大學出版社2017.1
- 盧 仁龍 『中国出版家・張元濟』北京・人民出版社 2017.2 國家出版家叢書
- 汪耀華編 『商務印書館史料選編(1897-1950)』上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社 2017.3
- 尹 奇嶺 『民国時期新旧文学關係散論』北京・中国社会科学出版社2017.3
- 陸煒主編 『中国話劇百年典藏』第1卷 早期新劇 北京・人民文學出版社2017.4
- 『中国話劇百年典藏』第2卷 五四時代 北京・人民文學出版社2017.4
- 禹 玲 『基督山伯爵』中文訳本考述(1900-1949) 『新文学史料』2017年第2期(總第155期) 2017.5.22
- 瀬戸 宏 『中国のシェイクスピア』中国語版あとがき 『中国文芸研究会会報』第427号 2017.5.28
- 王德威著、神谷まり子、上原かおり訳 『抑圧されたモダニティ 清末小説新論』東方書店 2017.6.25 台湾學術文化研究叢書
- 黎 子鵬 『福音漢義:晚清漢語基督教小説の書写』台湾・国立台湾大學出版中心2017.7 台大哈仏燕京學術叢書02
- 陳 大康 論近代小説の転載現象 『文学遺産』2017年第4期 2017.7.15
- 李 雲 近代新聞文体的興起对小説の影響 『明清小説研究』2017年第3期(總第125期) 2017.7.15
- 『中国現代文学研究叢刊』2017年第5期(總第214期) 2017.5.15
- “重写文学史”の歴史と反復 ……………韓 琛
- 《域外小説集》生成前史之再考察 以《玉虫縁》《荒磯》為中心 ……………宋声泉
- 晚清民国時期報人小説与報刊新聞的互文性 ……………康 鑫
- 『出版史料』2017年第1輯(新總第57期) 2017.7
- 六種商務印書館版の地圖冊 ……………張人鳳
- 商務印書館早期童書述略 ……………柳和城
- 張元濟の飯局 兼談其他文化人的雅集 ……………范 軍
- “三瑣記”:中国期刊之誕生 ……………汪家熔
- 方夢之、莊智象主編『中国翻譯家研究(歷代卷)』上海外語教育出版社2017.4
- 王韜…黎難秋/陳季同…黎難秋/林紓…林佩璇/嚴復…賀愛軍
- 方夢之、莊智象主編『中国翻譯家研究(民国卷)』上海外語教育出版社2017.4
- 伍光建…王建開/張元濟…賀愛軍/梁啓超…蔣林/杜亞泉…劉永利/王国維…金文寧/陳独秀…金文寧/魯迅…賀愛軍/馬君武…袁斌業/蘇曼殊…袁麗梅/周作人…方開瑞/王雲五…王金波/胡適…賀愛軍